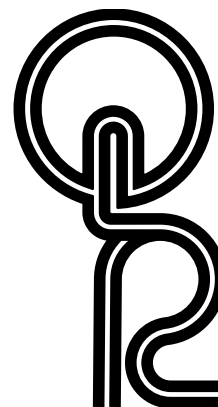


QR Newsletter



第四紀通信

Vol. 15 No.5, 2008



2008年学会賞・学術賞・奨励賞・功労賞受賞者の顔ぶれ。左上：学会賞受賞者（左 松島会員、中央 町田会長、右 大場会員） 右上：学術賞（左 横山会員、右 五十嵐会員） 左下：奨励賞（右 副田会員） 右下：功労賞受賞機関の代表。詳細は本誌報告を参照。（幹事会撮影）

Vol. 15 No. 5

October 1, 2008

2008年学会賞・学術賞・論文賞・奨励賞・功労賞	27
2008年大会報告	32
研究委員会活動報告	33
研究委員会委員募集	33
50周年記念事業実行委員会報告	37
博物館連絡委員会報告	38
INQUA 執行委員会・関連事業報告	39
日本学術会議報告	42
評議員会議事録	43
会計資料	44
総会議事録	
幹事会議事録	
編集委員会からのお知らせ	
第四紀・更新世問題	
講習会	
紙碑	
会員消息	
アジア旧石器協会設立	
生命の星・地球博物館特別展	
普及講演会	

日本第四紀学会では、学会賞、学術賞、論文賞、奨励賞、および功労賞を設けています。学会賞は、第四紀学の発展に貢献した顕著な業績や活動、および学会活動に貢献した正会員に授与される学会における最高の賞です。学術賞は、第四紀学に貢献した優れた学術業績をあげた正会員に授与されるものです。功労賞は、第四紀学の発展や学会活動に貢献した個人や団体、組織に授与されるものです。また、論文書および奨励賞は、会誌「第四紀研究」に掲載された第四紀学の発展や進歩に貢献する優れた論文を公表した会員である著者に授与されるもので、とくに奨励賞は若手研究者の育成と研究奨励に寄与することを目的としています。2008年の各受賞者について、以下にご紹介します。

2008年 日本第四紀学会 学会賞

・学術賞

日本第四紀学会学会賞・学術賞受賞者選考委員会(委員長 真野勝友、委員 大場忠道、小泉武栄、斎藤文紀、小野 昭)は、本学会員及び評議員から推薦のあった候補者について選考を行った(2008年5月24日、日本大学文理学部)ので、その結果を報告いたします。

学会賞

大場忠道「海底コア中の有孔虫化石の酸素・炭素同位体比を駆使した第四紀古海洋環境に関する一連の研究」

大場忠道会員は、日本では最も早い時期から海洋堆積物中の有孔虫殻を用いて酸素・炭素同位体比の測定を行い、第四紀後半における海洋環境の変遷を解明してきた。特に、日本海における最終間氷期以降の古環境解析やIMAGESプロジェクトコアに基づく古海洋学的研究では、日本列島を取り巻く海洋の古環境変遷を詳細に明らかにする上で大きな役割を果たしてきた。更にその成果が日本列島陸域の古環境復元に重要な制約を提示している点でも、大場会員が中心的に行ってきたこれらの研究は重要な意義をもつ。

また大場会員は、日本第四紀学会においても、地球化学分野を代表して合計で20年間評議員を務め、日本第四紀学会編「第四紀試料分析法」では、編集委員長としてその刊行に貢献し、学会活動を通じて第四紀学の発展に大きく貢献した。また指導者としても、多くの研究プロジェクトにおいて中心的な役割を果たし、多数の若手研究者と共同研究を組織し、古海洋学の研究を大きく前進させ、第四紀学に貢献している。

古海洋研究が第四紀の主要な柱の一つとなった今、酸素・炭素同位体比の分析によって日本

における古海洋研究を先導し、また発展させ、中心的役割を担ってきた大場会員の第四紀学への功績は甚大である。また、多くの後継者を育成し、学会活動を通じて第四紀学の発展に大きく貢献してきたことも顕彰に値する。

よって、大場忠道会員を日本第四紀学会賞に相応しいと判断し、ここに推薦する。

<受賞者の言葉>



大場忠道氏

会員ならば誰しも、学会賞を受賞できるこれ以上の名誉はありません。その第1回目に、私が囃らずも浴してしまっただけに良かったのだろうかというのが今の心境です。私が受賞できた最大の理由は、1980年頃から日本海の海底コアに含まれる有孔虫化石の酸素・炭素同位体比を用いて第四紀後期の海洋環境の研究に取り組み、主にグループを組んで日本周辺海域の古環境変遷を詳細に復元して来たことが認められ、更に私達の研究が日本列島陸域の古環境を研究している人達に少なからず影響を与えたことと理解しております。海底コアの研究は、意味の有る海域から最良のコアを採取し、多くの情報を詳細に引き出せるかどうかにかかっています。その点、私は東北大の院生～東大・海洋研の助手時代に毎年のように研究航海に参加し、どの海域でどのような海底コアが採取されたかを熟知していました。そして、海底コアを使った研究ができる状況になった時、仲間を募って学際的総合研究を実施することができ、その後も多くの仲間と一緒に研究を進めて来ました。そのお陰で、一人では少ししか明らかにできないものが、内容の濃い研究成果をその都度残すことができたと思われまふ。従って、今回の受賞はこれまで共同研究を行って来た仲間と一緒に頂いた賞であると私は認識しております。また、私は北大退職までに30数回の研究航海に参加しましたが、体質的に船に弱く採泥作業はいつも嘔吐しながらの苦しいものでした。そのため、陸上で詳しい解析はいくら行っても苦になりませんでした。その結果が私達のグループ研究を高分解能に導いた一因かも知れまふ。

学会活動としては、地球化学分野で20年間にわたって評議員を務めさせて頂き、その間主に我が国の古海洋学と同位体研究の発展に微力を尽くすことができたかも知れまふ。30年

前はほんの一握りの人しか集まらなかった古海洋シンポジウムを毎年海洋研で開催し、2001年には国際古海洋学会を札幌に招致でき、今や我が国の古海洋研究者も300人を越えるようになりました。また、当初は私達の分野で使えるマスは2台しか有りませんでした。金沢大で1982年に科研費で購入できたマスを酸素・炭素同位体を使いたい他大学の研究者や学生にも開放し、また北大に移ってからは窒素同位体を加え、今日の同位体研究の発展に多少なりともお役に立てたかなと思います。今後も、益々第四紀学及び学会の発展に努める所存です。

学会賞

松島義章「完新世における貝類群集解析に基づく日本列島及び周辺海域を中心とした海水準変動と古環境変化に関する一連の研究」

松島義章会員は三浦半島周辺の河川沿いの沖積層に海産貝類化石を含む内湾堆積物が顕著に発達していることを認め、これらの沖積層に関する古生物学的、層序学的研究を行った。この結果、沖積層から異なる六種類の貝類遺骸群集を識別し、これは縄文海進に伴い堆積した内湾堆積物として、内湾の位置(湾口、湾央、湾奥)や底質を反映しているものであることを明らかにした。そのすべてを具える典型的な内湾が大船付近に発達した古大船湾に見られることを指摘した。三浦半島における縄文海進とこれに対応する貝類遺骸群集の組成変化に関する一連の詳細な研究の成果は関東地方一帯の沿岸部沖積層の解析でも共通すること、さらに日本列島沿岸一帯についても同様に見られることを時間軸として用いた¹⁴C年代測定によって明らかにした。その結果、考古学においても各地の貝塚の自然科学的研究を通じた縄文時代の文化や環境復元等の研究にも大きく貢献することとなった。

こうした研究手法の確立は完新世日本列島の地殻変動量、海水準変動等についての評価も可能にし、全国的な展開による沖積層や段丘地形の発達史、黒潮海流や対馬海流の発達過程を明らかにするなど古海洋の研究にも貢献した。特に6000年前の対馬海流の発達したことは注目された。このような研究は近年盛んに議論されている急激な地球温暖化や海面上昇に伴う生物相の変化を考える上でも非常に重要な功績である。このような一連の研究は沖積層の貝類化石の研究に止まらず、第四紀の古生物学と地質学、生態学、地形学、考古学を総合化した、優れた学際的研究である。

また、地の利を活用した神奈川県立博物館での普及活動をはじめ全国の関連博物館とも連携し、研究や社会教育活動の活性化に力を注いできた。日本第四紀学会においては永年その運営や重要な出版活動にもたずさわって、日本第四紀

学会の発展に多大な貢献をしている。

よって、松島義章会員を日本第四紀学会賞にふさわしいと判断し、ここに推薦する。

<受賞者の言葉>



松島義章氏

この度は、日本第四紀学会賞という荣誉ある最高の賞を賜り、大変光栄に存じます。一地域博物館の学芸員として、完新世における内湾性貝類群集の研究を1970年から始めた。当時はバブルの真っ盛り、各地で大規模な開発工事が行われていた。横浜市内でも路面電車が廃止されて地下鉄工事が進められ、路線に沿って貝化石を含む沖積層を連続的に調べることができた。また、三浦半島低地では大雨のたびに洪水による浸水が起きていたため、各所で河川拡幅工事が行われ沖積層から多くの貝化石が掘り出されていた。これらの貝化石は全て現生種であるが、中に現在の南関東では生息しないハイガイやカモノアシガキ、タイワンシラトリなどが含まれていた。そこでこれらの資料を活かす地域研究を立ち上げた。

完新世の貝類の特長は、絶滅種を含んでなく、現生種で明らかにされている分類や生物地理、生態的な特徴をそのまま対応させて使えることである。縄文海進により形成された内湾堆積物は、形成年代が若い¹⁴C年代測定法が使え、精度の高い同時面を決定し広域にわたって対比ができる。さらに、沖積層中の貝類群の消長は、汎世界的な気候変動と海水準変動による変化で、地域的で個別な環境変動によるものでない。したがって、地域間を比較して貝類群の変化の共通性と、各地域の独自性とを分離して考察することのできる長所がある。

地元、神奈川県は三浦半島を挟んで南に相模湾、東に東京湾と面している。最初に相模湾と東京湾沿岸に分布する沖積層に含まれる貝化石群集の実体を明らかにする。そのため各地に共通して見られる貝類群集型を識別し、これをもとに群集型と堆積相との関係を明らかにした。次いで南関東へ調査地域を広げ、各内湾において局地的原因による堆積相の時間・空間的変遷を調べ、それに対応する貝類群集を明らかにした。さらに調査を拡げ南は鹿児島、北は北海道に至る地域における貝類群集組成にみられる広域的差異を明らかにした。そして、縄文海進に伴う貝類の生息環境の時代的・地理的な変化

と、特定な種の消長との関係を明らかにして、日本列島に於ける完新世の海岸環境の復元を行うことができた。

この一連の研究を進めるにあたり東京大学に居られた鎮西清高京都大学名誉教授にご指導とご支援をいただいた。さらに研究が進展するに当たり、故米倉伸之東京大学名誉教授、太田陽子横浜国立大学名誉教授をはじめ、関係する大学や研究所の先生方、また資料収集に当たってお世話になった各地の博物館の学芸員の方々に對し、この場をお借りして心より感謝申し上げます。

学術賞

五十嵐八枝子「北海道およびその周辺地域における古植生の変遷と古気候の復元に関する一連の研究」

五十嵐八枝子会員は、花粉分析による古植生の変遷と古気候の復元を主要テーマとする研究者で、1974年、『第四紀研究』に掲載された論文「札幌市北方低地帯における沖積世の古気候変遷」以来、多数の論文を公にしてきた。とくに北海道の古植生と古気候については、石狩低地帯や道東の泥炭地から、大雪山や天塩山地のような山岳地域の湿原までの広い範囲を調査対象にした、夥しい数の論文があり、たとえば、日本列島の最終氷期の植生や気候についてまとめた研究においては必ず引用されるなど、この分野における貢献度はきわめて高い。現生の表層花粉の検討を含む、緻密なフィールドワークと詳細な分析に基づく研究は、北海道の植生史研究における一つのスタンダードと見なされている。また研究成果は『北海道・森と木の文化』や『北海道の自然史』、『生態学からみた北海道』などいくつかの啓蒙書や専門書として社会に還元されている。

五十嵐会員は1990年代に入ると、フィールドをサハリンやカムチャツカ半島、シベリアなど、北海道の周辺地域に拡大し、それらとの比較において日本の第四紀植生史や現在の植生を考察するという仕事を始めた。このような視点は、最終氷期の古植生の復元や日本列島における北方植生の起源を考えるとときには不可欠で、現在では植物生態学者などにも広がっているが、その先鞭をつけた功績はきわめて大きいといえる。これらの地域における研究成果は、『第四紀研究』や『Quaternary Science Reviews』などに掲載されている。最近の業績では、房総沖の海底ポーリングコアの花粉分析を行った研究がある。この研究は多数の研究者によって様々な分析が行われたコアについて花粉分析が詳細に行われたもので、地域植生史をグローバルな環境変動に位置づけることを初めて可能にした点が高く評価される。

以上のような業績は日本第四紀学会学術賞にふさわしいと考え、五十嵐八枝子会員を候補者として推薦する。

<受賞者の言葉>



五十嵐八枝子氏

このたびは日本第四紀学会学術賞を賜り、大変光栄に存じております。

省みますと、大学卒業後再び研究生として母校北海道大学へ戻り、湊正雄先生のご指導のもとに花粉分析学の研究者としての道を歩み始めて、早や40年になります。この間家族の協力はもとより、多くの協同研究者に支えられて研究を続けてこられたことに心から感謝しております。

研究のはじめは石狩低地帯地下堆積物の分析でした。1970～80年代は地盤沈下に関連したポーリングが多く、私はこれらのコアを分析して更新世後期以降の植生史・気候変遷史を復元しました。同時に並行して、花粉の堆積機構を明らかにするため、苫小牧の自然林内にトラップを設置して、10日ごとに中の花粉を集計する作業を5年間続け、花粉が母植物から空中に散布され地上に堆積するまでの様態を調査しました。

90年代は極東地域への旅に明け暮れました。北海道では氷期にグイマツの花粉が多産します。グイマツは現在極東地域北部に生育する寒冷・乾燥気候の指標種です。グイマツの生態、分布地域の環境を見ずして氷期の植生復元はできないと考えました。中国小興安嶺やヤクーツクのグイマツを観察しましたが、北海道にとってはサハリンが最も関連深い地域です。当時サハリンへの渡航は不可能でしたが、88年に墓参団の一行に混じってはじめて訪れて以来、研究者仲間と「北方圏地質研究会」を結成して、ロシアの研究者との相互訪問を繰り返しました。私は4度のサハリン行で、ほぼ南北を縦断して植生観察と試料採取を行いました。幸運だったことは、タタール海峡に面する海岸露頭でサハリンでは唯一の約4万年間の連続試料を採取できたことです。95年には福田正己先生のコリマ川下流域調査のプロジェクトに参加して、森林ツンドラにおいて表層花粉と植生の関連を見る研究も行いました。こうした遠征は、北海道における氷期の古環境復元に役立てたと思います。

2000年代は高原光先生のプロジェクトで再びサハリン調査をするとともに、鹿島沖コアの分析に取り組みました。海底コア研究の魅力は、詳細な時間軸に裏打ちされた試料が得られることです。日本における海底コアの花粉分析は端緒についたばかりです。今後は地球規模の気候変動と日本の植生変遷の関連を探りたいと思います。最後に、分析室の使用を許して下さいているアースサイエンス(株)に、この場をかりて心から御礼申し上げます。

学術賞

横山祐典「最終氷期とその終焉時代における海水準および総氷床量変動に関する一連の研究」

横山祐典会員は、これまで多くの議論が重ねられていた最終氷期最盛期(LGM)の海水準について、優れた研究成果を『Nature』、『Palaeogeography, Palaeoclimatology, Palaeoecology』、『Quaternary Science Reviews』等の国際誌に公表してきた。これらの研究は、第四紀の特徴である氷期と間氷期の全球的な気候変化や古海洋並びに地表諸環境の研究の発展に大きなインパクトを与えるものである。

第四紀の氷期には高緯度に大規模な氷床が存在し、間氷期にはそれらの多くが融解した。このような過去の地球上に存在した総氷床量は、海面変動として記録されるが、その具体的な海面変動史を復元することは容易ではない。なぜなら、それには氷床の加重が地表に加わったり除かれたりすることによって起こるグレシオアイソスタシー、融氷水が海洋に再配分されることによって起こるハイドロアイソスタシーおよび地域的なテクトニックな変動が含まれるからである。

横山会員は、旧氷床域から遠く離れたテクトニックにも比較的安定な北西オーストラリアのボナパート湾から採取した海底コアの堆積相や古生物相と加速器質量分析による¹⁴C年代値から、2.2～1.7万年前の相対的海面変動を細かく復元し、LGM時の相対的海面高度が-121～-125mの位置で安定し、1.9万年前の急激な海面上昇によってLGMが終焉したことを明らかにした。さらに、相対的海面変動をグラシオハイドロアイソスタシーモデルによって補正を行い、氷床量相当海面変動という概念では、LGMは-135mに相当すること、これを陸域氷床の体積に換算するとLGMには現在よりも $52.5 \times 10^6 \text{ km}^3$ も多い氷床が存在したこと、1.9万年前にはその約10%がわずか数百年という短期間で融解したことを世界ではじめて明らかにした。また、パプアニューギニアのヒュオン半島の隆起珊瑚礁段丘の多数の放射年代測定

から、約5万年前以降にも、これまで考えられていなかったような、海面が10～15mほど上昇するような急激な氷床融解のイベントがたびたび生じ、これらのいくつかは北大西洋の海底堆積物で確認されるハインリッヒイベントに対応することも、その後の一連の研究で報告した。最近では、これらの最終氷期の地球規模の海水準変動の成果を、高い時間分解能で編年された日本海の深海底堆積物の古海洋学的解釈にも適用するなど、日本とその周辺地域の古環境・古海洋研究の進展にも大きな影響力を与えている。

以上のように、横山祐典会員は最終氷期とその終焉時代における海水準および総氷床量変動に関する一連の研究において国際的に高く評価される研究成果を公表しており、日本第四紀学会学術賞にふさわしいと判断されるので、ここに推薦する。

< 受賞者の言葉 >



横山祐典氏

この度は第一回日本第四紀学会学術賞という素晴らしい賞をいただき、誠にありがとうございます。大変光栄に感じますとともに、私のようなものが受賞してもよいものかと恐縮しておりますが、“今後も引き続きしっかり頑張るように”という激励の意味なのだと思っております。

受賞対象にもなりました海水準変動の研究ですが、とても古典的な研究であるとともに、現在でも盛んに進展している分野でもあります。例えば地球温暖化に伴う将来予測などとの関係で、IPCC(気候変動に関する政府間パネル)報告書などでも常に中心になるトピックです。現在進行中の海水準の上昇は、IPCCの見積もり幅の上限に近いところを推移しており、今後の変動の予測の確度をあげる重要性が増しています。過去の変動の記録とタイミングを正確に決定し、対応する気候変動との関連性を定量的に把握するとともに、気候モデルとの整合性についてチェックするという研究をすすめるべし、ということがIPCC報告書でも繰り返し述べられています。ここはまさに第四紀学の守備範囲であり、今後も当該研究を積極的に進めて行く必要があるかと思っております。

これまでに、主に最終氷期の海水準(氷床量変動)を復元してきました。最終氷期に繰り返

して起こった、ハインリッヒイベント(HE)とよばれる大規模な寒冷イベントの際に、10～15 mの海水準上昇が伴っていたことは、パプアニューギニア(PNG)のヒュオン半島の隆起サンゴ礁を用いて行いました。我々の論文の出版前には、HEの際の海水準上昇は高々2～3 mほどだとモデルで予測されていました。しかし現在では紅海の酸素同位体比の研究から、最大では30 mにも及んだ可能性が指摘されて来ています。これまでに4度、PNGに行きましたが、フィールドにおける観察と、実験室での化学分析結果を考慮すると、やはり大規模な氷床量の減少が起こっていたことは間違いなさそうです。また最終氷期最盛期(LGM)の最大氷床量とそのタイミングを復元した研究は、アイソスタシーの影響が小さい、旧氷床域から遠い北西オーストラリア沖とグレートバリアリーフにて行いましたが、LGMの氷床量が、海水準にして-130 mほどであったことと、LGMの終焉が19,000年前であり、19 ka-Mwpという急激な海水準上昇により特徴づけられるという結果を発表しました。これについては当初、古海洋学の研究者などからは、“そんなに海水準が下がっていたはずは無い。そうであったら、深層水はほとんど凍ってしまうくらいに水温が下がっていたことになる”と批判されていました。深海堆積物コアから得られた有孔虫の酸素同位体比の変動という“間接的な”氷床量指標の規模とタイミングが頭に強くあったためだとおもわれます。しかしその後、堆積物コアの間隙水から求められた酸素同位体比変動と、塩素濃度の変化のどちらもが、私たちの発表の結果と整合的であることが示され、19 ka-Mwpについても、北半球氷床の融解によるものであるという研究結果がいくつか発表されるに至っています。気候変動研究において重要な研究分野であることが伺えるとともに、より直接的なデータをフィールドと実験室、モデルのバランスをうまくとりながら研究することの大切さを、これらの経験から学びました。

現在IODP(統合国際深海掘削計画)でタヒチのサンゴを使った海水準の研究を進めています。また来年行われるグレートバリアリーフでのIODP航海では首席研究員を務めることになり、これらの研究結果も、今回いただいた賞を励みに、しっかりした成果として発表できるように頑張りたいと思っています。最後になりましたが、これまでの研究は、諸先生方、共同研究者、学生やポスドクなどのサポートによって行われてきたものです。ここに記して謝意を表したいと思います。

2008年 日本第四紀学会 論文賞・奨励賞

日本第四紀学会論文賞選考委員会[犬塚則久委員長(古生物)、池田安隆(地理)、井内美郎(地質)、久保純子(地理)、鈴木三男(植物)各委員]は『第四紀研究』第45、46巻に掲載された会員を筆頭とする論文を対象として、2008年日本第四紀学会論文賞および奨励賞受賞候補者を選定いたしましたので、ご報告いたします。

選考にあたっては内規に従い、第四紀学の発展や進歩に貢献する優れた論文のなかから、論文の独創性、将来の発展性、総合性や重要な発見などを基準に審議しました。とくに論文賞候補には論文の完成度、奨励賞候補には将来性を重視して選びました。また選考委員の専門分野や経験の差から公平さを欠かないよう選考手続きに配慮いたしました。

論文賞・奨励賞

総説 澤井祐紀(2007)珪藻化石群集を用いた海水準変動の復元と千島海溝南部の古地震およびテクトニクス 第46巻4号、363-383頁。

本論文は、沈みこみ帯における過去数千年間の隆起・沈降イベントを、相対的海水準変動を精密に復元することによって解明しようとする研究に関する総説である。この種の研究は過去約十年間で飛躍的に進歩し、沈みこみ帯における応力の蓄積・開放過程とそれに伴う超巨大地震の研究に重要な観測的拘束を与えつつある。

相対的海水準の精密復元には、サンゴ礁や珪藻化石群集の分析が有効であるが、後者は特に適用範囲が広く、また筆者を初めとする日本人研究者の貢献が著しい分野でもある。筆者は、珪藻化石群集の分析を沈みこみ帯における隆起・沈降イベントの復元という明確な目的意識を持って行ったが、珪藻分析を単にツールとして用いるだけでなく、分析手法の開発にまで踏み込んだ研究を行った点も特筆に値する。

本論文は、総説ではあるが、筆者自身とその共同研究者による研究成果を中心にまとめたものであり、オリジナリティーは高い。また、方法論や研究史に関しても余すことなく丁寧に記述され、後学の徒には必須の参考論文となるであろう。よって本論文は日本第四紀学会論文賞にふさわしいものと評価する。

<受賞者の言葉>

澤井会員の受賞の言葉は、本誌次号に掲載いたします。(広報幹事)

奨励賞

論説 副田宜男・宮内崇裕(2007)変動地形と断層モデルからみた出羽丘陵の第四紀後期隆起過程と上部地殻の短縮変形 第46巻2号、83-102頁。

本論文は、東北日本内弧における上部地殻の短縮に伴う活構造形成と地表変形の過程を、出羽丘陵の第四紀後期河成面の変位様式の解析と断層モデルに基づいて解明した研究成果である。

筆者らは段丘被覆層中に確認された洞爺火山灰(Toya)によって段丘面の形成時期を限定し、今回検討対象とした河成段丘が最終間氷期最盛期に形成されたことを明らかにした。そして現在の河床高度と段丘面高度との比較により、過去約10万年間における垂直変位速度分布を明らかにした。こうして得られた地表変位速度データを拘束条件とし、くいちがい弾性論に基づくフォワード・モデリングによって、出羽丘陵に地下に存在すると予想される断層の形状を検討した。その結果、出羽丘陵の地下には2つのランプを持つ地殻スケールのデコルマが存在する可能性が高いことを明らかにした。

本研究は、変動地形学的手法によって地殻スケールの活構造を解明しようとするユニークな試みであり、その研究成果は高く評価できる。よって、本論文(筆頭著者の副田宜男氏)は日本第四紀学会奨励賞にふさわしいものと評価する。

<受賞者の言葉>



副田宜男氏

このたびは、日本第四紀学会奨励賞という名誉ある賞を賜り、大変光栄に存じます。本論文は筆頭著者の副田が千葉大学に提出した博士論文の一部をとりまとめたものです。本研究の遂行にあたっては、本論文の共著者で指導教官でもありました宮内崇裕先生をはじめとする多くの先生方、宍倉正展博士(現・産業技術総合研究所)をはじめとする千葉大学大学院生諸氏に多大なご指導と励ましを賜りました。また、計算プログラムの使用を快諾くださった産業技術総合研究所の小松原 琢博士、変動地形学の研究に携わるきっかけを与えてくださった京都大学の堤浩之先生、論文投稿以降、投稿論文の受理・印刷まで丁寧に面倒をみてくださった、査読者、編集委員および編集書記の皆様にご心よりお礼申し上げます。

今回、奨励賞をいただきました論文は、更新世河成段丘面群の地域的変形にもとづき、伏在する活断層の位置形状と第四紀後期の活動を質的・量的に推定し、上部地殻の短縮に伴う活構造の進行と地形形成の関わりを解明することを目的としています。本論文では、まず火山灰編年学的手法により河成段丘の形成史を確立し、現河床と河成段丘面の高度との比較から過去約10万年間の垂直変動を定量的に求めました。これらの資料を拘束条件として、くいちがい弾性論にもとづく断層モデリングによって、出羽丘陵下の断層形状について検討したところ、2つのランプをもつ折れ曲がり断層が存在し、これらの運動が出羽丘陵の概形を決めてきた可能性が高いこと、そして1914年秋田仙北地震の震源断層の可能性が高いことを示すことができました。本研究はオーソドックスな変動地形学的手法を礎としていますが、そこから構造地質学や測地学、地球物理学との境界領域へ踏み込んだ本研究を評価いただいたことは、「そもそも山地はどうしてできるのか?という素朴な理学的疑問を解く」ことの意義をあらたにするもので、たいへん嬉しく思っております。

近年、各研究分野において活構造に関する多様なデータが高精度で蓄積されてきています。本論文で対象とした東北日本背弧の地下構造・地形形成プロセスについてもこれらのデータを学際的に扱い、より緻密な検証と統合的な理解を進める必要があると考えます。このたびの受賞を励みとし、今後も島弧テクトニクスの研究を通じて第四紀学の発展に寄与できるよう、精進したいと考えております。皆様の一層のご指導・ご鞭撻を心よりお願い申し上げます。最後になりましたが研究活動を支えてくれた家族にこの場をお借りして感謝の言葉を添えさせていただきます。

奨励賞

総説 植村 立(2007)水の安定同位体比による古気温推定の研究 - 極域氷床コアからの数千年スケールの気候変動の復元 - 第46巻2号、147-164頁。

本論文は、氷床コアから導かれた数千年スケールの気候変動とその南北両極での比較における最近の知見と問題点を概観した上で、古気温推定のための新しい取り組みを紹介しながらその問題点解決の可能性を示したものである。その要点は以下のように示される。

1)近年、グリーンランドと南極の氷床コアから、最終氷期に千年スケールの激しい気候変動があったことが示された。また、グリーンランドと南極では位相差を示すようにみえ、「両極シーソー現象」とも呼ばれている。しかしこの

メカニズムについてはさまざまなモデルが提唱されているものの、定説が得られているわけではない。

2)氷床コアから古気温を推定するためには水の安定同位体比が利用されるが、「古典的な」同位体温度計は、掘削孔温度解析やガス同位体を用いた解析と比べて、LGM(最終氷期極相期)の温度低下が過小評価された。過去の気温変動を正確に復元するためには、降雪量の季節変動や、極域に雪をもたらした水蒸気が蒸発した海域の表面水温の復元が必要である。

3)この問題に対し、過剰重水素(d-excess)を用いた新しい水同位体温度計を紹介し、数値モデル計算や著者らによる南極ドームふじのd-excessと海洋底コアにおけるSST(海面水温)の変動との相関から、水蒸気が蒸発した海域の環境変動を推定できる可能性を示した。

以上の点は、氷床コア研究の総説としても充実した内容であるとともに著者のオリジナリティも明確で、今後の研究の飛躍が期待され、奨励賞にふさわしいと判断する。

<受賞者の言葉>



植村 立氏

この度は日本第四紀学会奨励賞を賜り、大変光栄に思っております。今回、賞を頂いた論文は、2005年に国立極地研究所において開催された研究集会『第四紀後期の1000年スケールの気候変動の発源地と伝搬機構についての最近の研究』での発表内容に加筆・修正したものです。第四紀研究に投稿するきっかけを作ってくださった国立極地研の三浦英樹博士、及び初稿に丁寧なコメントを下さった2人の査読者に感謝いたします。また、氷床コア試料の採取と処理に関わったドームふじプロジェクト研究メンバーの方々、国立極地研の本山秀明先生、博士論文のご指導いただいた東京工業大学の吉田尚弘先生、海洋研究開発機構の栗田直幸博士をはじめ、研究の過程で多くの方々からご協力とご助言を賜りました。ここに記してお礼を申し上げます。

グリーンランドと南極氷床から得られた氷コアの解析は過去20年間で大きく進歩しました。しかし、氷床コア解析はまだ新しい分野でもあり、第四紀研究のような自然環境の変遷を学際的に研究する分野にむけて、その解析法や気候学的な解釈をまとめた総説は限られています。

そこで本総説では、最終氷期において、グリーンランドと南極で数千年周期の気候変動の位相が異なっていたことを示す研究を総覧し、とくに過去の気温を復元する手法について詳細に解説しました。また、水の水素と酸素安定同位体比を組み合わせた指標(d-excess)を用いて、水蒸気が蒸発した海域の古環境を復元する手法について研究の現状と将来への展望をまとめました。

なお、本論文が受理された後もヨーロッパグループの南極氷床掘削の成果が多数発表されました。日本のドームふじコアも含めて、基盤岩付近まで達した複数のコアから得られつつある研究成果が今後も続くことが予想されます。これからも氷床コアの研究を通じて日本の第四紀学の発展に多少なりとも寄与していきたいと思っております。今後とも皆様のご支援・ご指導をよろしくお願い申し上げます。

2008年 日本第四紀学会功労賞

幹事会では、2008年日本第四紀学会功労賞候補者として下記の機関を推薦しましたので、ご報告いたします。

功労賞 博物館連絡委員会参加各博物館

博物館連絡委員会(委員長:松島義章会員)は、日本第四紀学会が50周年を迎えることを契機に、その活動を紹介する展示等を行うことと博物館の連携をはかることを主な目的として2005年8月に結成された。これまでに7博物館で第四紀学会の活動に関するパネルや出版物の展示と特別展など第四紀学に関する独自のイベントが行われ、第四紀学会及び第四紀学の普及に大変貢献をされた。また全国各地の第四紀学に関する博物館や文化財センターなどの施設リストを作成し、会員名簿に掲載をしていただいた。さらに、これらの博物館では、長年にわたり、展示や観察会などのイベントを通し、第四紀学をはじめとする自然史学の魅力と重要性を広く一般市民に普及し続けてきた。また、いくつかの博物館では、第四紀学会が主催する大会、シンポジウム、巡検などの運営に積極的に参加されたほか、講習会の会場提供や講師を務められた。

これらの貢献は、日本第四紀学会功労賞の対象としてふさわしいと判断され、博物館連絡委員会参加博物館を功労賞受賞候補者として推薦する。

博物館連絡委員会参加博物館リスト：

北海道開拓記念館、苫小牧市博物館、青森県立郷土館、千葉県立中央博物館、産業技術総合研究所地質標本館、神奈川県立生命の星・地球博物館、野尻湖ナウマンゾウ博物館、豊橋市自然史博物館、福井市自然史博物館、滋賀県立琵琶湖博物館、大阪市立自然史博物館、兵庫県立人と自然の博物館、徳島県立博物館、島根県立三瓶自然館

< 受賞者の言葉 >



博物館連絡委員会参加機関の代表者

この度は、博物館連絡委員会参加の各博物館に日本第四紀学会功労賞を授与していただきまして、大変光栄に存じます。ここに深く感謝申し上げます。日本第四紀学会50周年をきっかけに学会と博物館との連携を目的とした博物館連絡委員会が組織され、その呼びかけに14博物館が賛同して、日本第四紀学会の活動や第四

紀学研究を紹介する展示やイベントを行うことになりました。学会50周年を記念して2006年7月から2007年11月にかけて、各地方の特色をふまえた第四紀研究の発展を紹介する特別展や企画展を8博物館で開催するとともに、学会が主催する大会やシンポジウムや野外巡検などに参加協力することもできました。このように博物館活動として、第四紀学を中心とした自然史研究の面白さを全国的に展開できたのは、学会との連携が大きな力となったといつてよいと思います。自然史系博物館は、自然史資料や考古資料を「集める」、「調べる」、「伝える」という地味な仕事で支えられていますが、無目的にむやみに集めているわけではありません。いろいろな研究分野の進展を示す証拠として、あるいは将来に発見が期待される研究素材として、重要なものを収集蓄積するように博物館活動は続けられています。また、コレクションや研究がいかに関重要であるかを、博物館特有の手法である展示を用いて表現し、自然がいかに関魅力的か、自然から私たちが何を学んできたかを伝える役割も果たしています。しかし、博物館は社会的な不景気の影響を受けて、本来の活動基盤が軽視される傾向にあり、これまで蓄積してきた文化・伝統が消失するおそれがあると心配されています。今後とも貴学会のご支援とご指導をよろしくお願い申し上げます。博物館としましては、これからも貴学会との連携を通して第四紀学の楽しさや重要さを伝える機会をつくれますことを期待しつつ、学術研究の発展に貢献できますことを望んでおります。

(受賞者代表 神奈川県立生命の星・地球博物館 齋藤靖二)

日本第四紀学会2008年大会報告

日本第四紀学会2008年大会が、8月22日(金)～8月24日(日)の3日間にわたって、東京大学本郷キャンパス理学部1号館小柴ホールにおいて開催されました。本大会では、一般研究発表のプログラムが組まれた後に、ポスターセッション形式で緊急セッション「岩手・宮城内陸地震」が急遽追加されることになり、昨年の「中越沖地震・能登半島地震」緊急セッションに続いて、2年連続の緊急対応となりました。大会参加者数は、3日間を通して、合計281名(会員179名、非会員102名)でした。

一般研究発表は、22日と23日の2日間にわたって行われ、オーラル41件、ポスター26件、緊急セッション「岩手・宮城内陸地震」2件の発表がありました。また、24日にはシンポジウム「第四紀後期の気候変動と地球システムの挙動 - その原因とメカニズムの解明に向けて - 」が行われ、9件の発表がありました。第四紀後期を中心とした時代に焦点を当てて、世界各地の氷床コアや海底堆積物コアから明らかにされてきた高時間分解能の環境変動データとともに、地球システムの挙動に関する様々なアイデアが提示される内容で、中身の濃い講演が続きました。特に日本周辺の古環境の変動の原因として、黒潮とその続流が作る時計回りの太平洋西岸流と反時計回りの亜寒帯還流の位置の緯度方向への移動、対馬海流の変化、モンスーンや風成塵の強弱、カリフォルニア湾流やエルニーニョとの関係などが指摘され、総合討論では、これらの日本周辺の海洋変動と国内の山岳氷河や扇状地・河成段丘の発達との関係が議論されました。

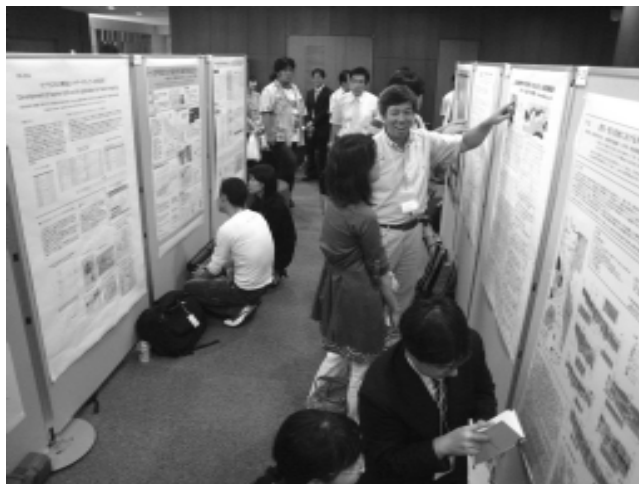
一般研究発表会の合間には、評議員会と総会が開催され、2007年度の事業・決算・会計監

査・委員会および各研究委員会等の報告と、2008年度事業計画・予算案等の審議が行われ、承認されました。なお、前日行われた評議員会や総会において、議論ないしは報告された事項として、学会運営として今後、第19回INQUA大会日本招致準備委員会の設置、学会賞規定及び学会賞と学術賞選考に関する選考委員会委員の選考と受賞候補者選考のスケジュールについての検討、知的財産権等に関連した会則改訂・法務委員会設置・除名に関する細則等についての再検討、50周年記念事業実行委員会継続などの諸課題があります。以上の点をここに記しておきます。総会終了後、学会賞2件・学術賞2件・論文賞受賞1件・奨励賞2件・功労賞14件の授与式がありました。このうち、学会賞・学術賞・功労賞は、今回ははじめての授与となります。

23日の夕方には、本郷キャンパス内の山上会館にて懇親会が開かれました。懇親会開催直前の学生参加費値下げが功を奏し、参加者は学生アルバイトを含めて99名に及びました。会場では、東京大学オリジナル泡盛や南極の氷もふるまわれ、大いに盛り上がっていました。25日から26日にかけては、「関東東部沿岸域の地質・地形・人間活動」と題する巡検が行われました。案内者は岡崎浩子、目代邦康、田村 亨、中里裕臣、中島 礼、納谷友規、江口 誠の7氏で一般参加者は28名でした。なお、巡検の詳細な報告は本誌次号に掲載される予定です。

最後になりましたが、大会の準備・運営を進めていただきました実行委員会委員長の多田隆治さん、事務局長の三浦英樹さんをはじめとする東京大学・国立極地研究所関係者の方々に、ここからお礼を申し上げます。

(行事担当幹事 鈴木毅彦)



ポスターセッションの様子(幹事会撮影)

2007年度研究委員会報告

INQUAのCommission、International focus groupなどのプロジェクトに対応した研究委員会活動を募集し、5件の申請を確認した。第2回評議員会での承認をうけ、支出を含めた年間計画書の提出を依頼し、それをもとに予算配分を検討した。大会シンポジウム等での成果発表を要請するといった、成果の還元方法について検討を行った。2007年度は以下の5委員会が活動を行った。

地球温暖化問題を検討する研究委員会(代表者：陶野郁雄)

本研究委員会は、本年2月の委員会設置後、メールで各委員の意見を求めつつ、委員の拡充を図ってきた。その結果、現段階での委員は19名(内非会員5名)となっている。また最初の活動として、「地球温暖化フォーラム2008」として、スイス国立工科大学の大村 纂教授に講演をお願いすることにした。そして、関係省庁や学会の後援を得て、7月12日に日本大学文理学部100周年記念館国際会議場において実施した。大村教授は洞爺湖サミットのため来日中で、『現温暖化現象下における氷河の変遷』をテーマに最先端のデータをもとに講演を行い、聴衆に感銘を与えた。混雑が予想されたため、予定の午後の部(14:00-16:00)以外に、急遽学生向けに午前の部(10:30-12:30)も行った。参加者は午後の部が約120名、午前の部が約240名であった。

7月12日のフォーラム終了後、第1回委員会を開催した。出席者は12名であった。第1回の委員会であることから、各委員より自己紹介と共に委員会活動との係わりについての報告がなされた。委員長から、情報の収集とその共有化及び一般の人に対する広報を主目的とし、主にメールを用いて活動したいとの報告があった。そして、今後の活動について議論を行った。

東アジアにおける酸素同位体ステージ3の環境変動と考古学研究委員会(代表者：小野 昭)

酸素同位体ステージ3(OIS3)には人類の進化史、道具の製作技術史、現代的な認知構造の展開や芸術活動の開始問題など、どれをとっても重要な問題が集中している。こうした諸問題をめぐりヨーロッパを中心に議論されてきた資料的な前提、研究の問題意識、論点を明らかにし、それをふまえて東アジア、日本列島における当該期の環境変動と考古学がかかえる問題の解明を試みることを、本研究委員会の目的として設定し、プロジェクトが2008年2月に始まっ

た。以下2007年度後半の活動を報告する。また、本研究委員会としてINQUA Project 2008に予算申請し採択された。今後他の研究委員会が申請する際の参考となるよう要点を記す。

(1)全体計画の策定：2008年4月26日 首都大学東京(八王子南大沢)で5カ年計画原案作成の会議を開催した。大筋で以下の予定を了解した。

2008年6月 日本旧石器学会第6回大会と共催でシンポジウムを開催する。

2009年2月 日本第四紀学会シンポジウムを当研究委員会の内容で引き受ける用意がある。2010年(月未定)日本で国際研究集会(ワークショップ)を開催する。

2011年 成果の取りまとめに入る。

2012年 Quaternary International に特集号を組む。あるいはB.A.R.(British Archaeological Reports) International Series に論集として申請する。日本語の論文集は別途刊行の実現を目指す。

(2)2008年6月21・22日に日本旧石器学会大6階大会と本研究委員会の共催でシンポジウム「日本列島の旧石器時代遺跡：その分布・年代・環境」を開催した。後援は日本学術会議、ならびに国際第四紀学連合(INQUA)「古生態と人類進化研究委員会」(Commission on Palaeoecology and Human Evolution)。

1)ドイツから著名な研究者2名を招聘し記念講演をおこない、2)OIS3の中頃の古気候変動、年代論、動物相、植物相など、第四紀学の諸分野の成果を、旧石器考古学の検討課題とリンクさせてシンポジウムとをおこなった。全体は記念講演、一般発表、シンポジウムの3部で構成。記念講演は、本シンポジウムに深く関連した地域的で、グローバルなテーマと¹⁴Cの較正年代の問題について問題提起がされた。

N.コナード (Nicholas Conard テュービンゲン大学考古学研究所教授)：

Current research on the late Middle Paleolithic and early Upper Paleolithic of the Swabian Jura

O. イェリス (Dr.Olaf J_iris ローマ・ゲルマン中央博物館旧石器研究部門)：

The impact of an U/Th-Hulu-based radiocarbon age calibration on the OIS 3 archaeological record

この共催シンポジウムは本研究委員会としての最初の取り組みであった。委員会のメンバーからは、工藤雄一郎氏が「40～15kaの石器群の年代と古環境」、公文富士夫氏が「野尻湖データによる過去6万年間の気候変動の複元」

の題目でそれぞれ基調報告をおこない、叶内敦子、公文富士夫、高橋啓一の各氏が関連テーマについてコメンテーターとして発表をおこなった。参加者数は、名簿への記入が170名、21・22両日を合わせると延べ約200数十名にのぼる。シンポジウムの内容は、2008年7月9日の朝日新聞全国版にも「歴史に探る気候変動(上)」として大きく取り上げられた。

(3) INQUA Project 2008 への申請と採択

2008年のINQUA Projectの公募があり、その締め切りが2008年1月30日であった。本研究委員会は準備段階であったがこれに申請した。Inter Congressの4年間であるが、申請は1年ごとである。本研究委員会から題目に幅を持たせ、Palaeoenvironmental changes and human dispersals in North and East Asia during OIS3 and OIS2で申請した。このプロジェクトの性格はINQUAのHPに記されているが、特徴点を列挙する。申請は所属のCommissionを通じてINQUA本部に提出する。補助金支給に関する注意点として、広域をカバーし特定のコミッションのテーマだけに限定されないプロジェクトが推奨される。問題解決型プロジェクトがのぞましく、単一のワークショップや一般的な会議は適合しない。フィールドでの調査研究に補助金は支給されない。途上国の若手研究者への参加旅費の援助は推奨される。成果はQuaternary International誌に掲載されるよう考慮する、など。申請額の上限は5000USドル程度である。今回の申請では上限を少し上回る額で要求。若干減額されたが、2008年4月24日に採択と金額(ユーロ)の内示連絡を受ける(承認の公式Project No.0807)。内示から実際に指定額が銀行口座に振り込まれるまでの過程は以下のとおりであった。

4月28日内示。内示文書(添付の内示文書の日付は4月24日)に、さらにプロジェクトの「具体的な目的」と「予想される結果(成果)」の補足説明を求める旨の要請あり(申請者としては十分に具体を尽くして申請したつもりだが)。5月3日に本部とCommission President宛にA4サイズ2枚弱の補足説明を簡条書きで送る。5月5日承認の連絡を本部から受ける。5月17日財政担当に連絡。5月19日に支払方法の指示と領収書、その他必要書類準備の注意あり。5月27日に振り込まれる。

補助金はその大半を6月21・22日のシンポジウムに有効に使用した。アジアからのプロジェクト申請は今回が最初であったという。次の機会に申請を予定している研究委員会で、さらに具体的な情報が必要な方は、小野まで連絡されたい。

気候変動研究委員会(代表者:公文富士夫)地球温暖化問題を検討する研究委員会、テフラ研究委員会などと協力して、新学術領域として「近未来の環境変動予測を確実にするための古気候・環境情報の統合と展開」を申請した。これは、学会長のリーダーシップのもとに、第四紀学会が果たすべき社会的役割にも対応したもので、関連する幅広い分野における大きな学術的進展を図れるものと考えている。今年度の審査結果は未決定だが、計画の充実を図りながら、ねばり強く取り組む。

このような経過を踏まえ、また、具体的な研究推進策の一環として、7月13日に日大文理学部100年記念館を会場として研究集会を開催した。43名の参加があり、10件の講演がなされ、活発な議論が行われた。また、学会の枠を越えた協力関係の必要性も確認され、2008年度の地球惑星合同大会で合同セッションを立ち上げるように、PAGES委員会とも調整することとした。

テフラ・火山研究委員会(代表者:長岡信治) INQUA International Focus Group on Tephrochronology and Volcanology (INTAV) は、INQUA 第17回ケアンズ大会以降、旧 Sub-Commission on Tephrochronology and Volcanism (SCOTAV)を引き継いだ組織であり、日本国内では、テフラ・火山研究委員会が対応窓口となっている。近年、カナダ・ドーソンで開催された野外集会(2005年)とオーストラリア・ケアンズで開催されたINQUA大会(2007年)においては、いずれも日本でのInternational Field Conference and Workshop開催が話題にあがり、日本開催の機運が高まりつつある。これを受けてすでに2006年度におけるテフラ・火山研究委員会では、日本招致について基本的な合意が得られている。したがってテフラ・火山研究委員会の活動は、その準備・実行が中心となる

2007年度の活動報告を以下に記す。2007年12月23日に明治大学博物館会議室にて委員会メンバー8名が集まり、INTAV 招致準備・実行委員会を正式に設置し、福岡孝昭が準備・実行委員長に選出された。また、この第1回委員会では会場候補として九州があげられ、時期や運営費取得について議論された。2008年4月29 - 5月1日にかけては、候補地である鹿児島において集会開催地・巡検コースの下見を行ったが、この時までには開催時期を2010年春とした。その後、日本地球惑星科学連合2008年連合大会期間中の5月28日に招致準備・実行委員会を開催し、会場・巡検・時期について詳細に検討した。その後6月中に福岡準備・実行委

員長が鹿児島にて検討を行い、最終的に会場を霧島市にすることが決定された。

古地震・ネオテクトニクス研究委員会(代表者：吾妻 崇)

例年実施している野外集会については秋に開催する方が望ましいと判断し、今期は実施しなかった。INQUA の Focus Area

“Paleoseismicity and Active Tectonics”で議論されている自然現象に基づく震度階について2008年地球惑星科学連合大会の「強震動・地震災害」のセッションでポスター発表した。また、第33回IGCオスロ大会における関連セッションとビジネスミーティングに向けてFocus Areaの代表者Alessandro Michetti氏と連絡をとりあった。

古気候変動研究委員会の委員募集

第四紀学会内の古気候変動、古環境変動の研究の推進をめざして、またINQUAのPALCOMに対応して、第四紀学会内で活動するものです。これまで発起人を中心に連絡を取り合ってきましたが、広く有志を募り、委員会活動を活性化したいと考えております。氏名、所属、電子メールアドレスを公文宛にお送り下さい(宛先: shkumon(at)shinshu-u.ac.jp)。勉強会や研究集会、プロジェクト研究への参加などの呼びかけや参加案内等をお送りします。日本のPAGES小委員会とも連携して活動を進めます。

古気候変動研究委員会 代表者 公文富士夫

50周年記念事業実行委員会報告(委員長：熊井久雄、事務局長：山崎晴雄)

国際シンポジウムの実施状況については2007年度第2回評議員会(2008年2月2日開催)において詳細が報告され、内容は第四紀通信15巻2号(2008.4)に掲載されている。

CD出版物(デジタルブック 最新第四紀学)に関しては、5月の地球惑星連合大会を目前に完成を目指していたが、編集作業と著作物転載許可の取得などに予想外の労力と時間がかかり、発行が9月以降に延びることは確実にになった。このため、50周年記念実行委員会では2008年7月末を以て解散する予定にしていたが、CD出版物の完成まで、委員会を継続することとした。完成後、正式な会計報告等を行って委員会を解散する予定である。

国際シンポジウム終了後も募金が集まっており、2008年7月1日現在、募金者総数368名、募金総額4,138,000円に達し、これらは国際シンポジウムでの海外研究者の招聘などに活用され、今後のCD出版物作成にも利用される旨の報告があった。

日本第四紀学会創立50周年記念事業 募金者芳名

増田耕一、熊井久雄、杉山富雄、三川憲一、金子 稔、水野篤行、松井 健、垣見俊弘、亀井裕幸、竹中 純、田中治夫、平井幸弘、古川博恭、千田 昇、大澤 進、松葉千年、満岡孝、中島光世、今泉知也、青木賢人、三島弘幸、鹿島愛彦、桑島 達、鈴木 茂、野中俊夫、豊田和広、吉田 義、守田益宗、松橋義隆、木暮 翠、永井節治、藤森孝俊、山崎晴雄、奥村晃史、菅 香世子、櫻尾重信、田辺 晋、勝田和利、東 将士、三田村宗樹、石井久夫、田口公則、久保純子、島口 天、井上公夫、辻誠一郎、古内栄一、吉川周作、小林武彦、山崎博史、沖津 進、杉村 新、長太伸章、佐藤裕司、荒井 格、植村善博、栗山知士、八千代エンジニアリング総業事業本部、半田久美子、黒田登美雄、兵頭政幸、能條 歩、田原敬治、小池一之、松浦秀治、北村晃寿、早田 勉、倉林三郎、伊藤 隆、井上 弦、藤井昭二、松村 淳、和田温之、松島義章、楡井 尊、斉藤享治、西田和浩、飯島義雄、讃岐利夫、高

田将志、長内優之、萩原法子、福岡孝昭、藤森雄一、町田 洋、水野秀明、上原克人、長友恒人、水野清秀、劔持輝久、池田 晋、山口啓子、浅川一郎、松井和夫、廣瀬玉紀、諏訪靖二、坂上寛一、片岡香子、小野弘道、渡邊眞紀子、野川 潔、杉山雄一、浅井朋代、松山澄久、上杉 陽、清水恵助、鈴木毅彦、石綿しげ子、原 芳生、奥野 充、小泉武栄、長橋良隆、小林忠夫、金沢直人、満岡 孝、陶野郁雄、楮原京子、檀原 徹、柏谷健二、真野勝友、星野フサ、会田信行、松下まり子、丹羽俊二、山縣耕太郎、遠藤邦彦、細矢卓志、河村善也、中村琢磨、岩田修二、矢島典夫、里口保文、中村俊夫、菊地隆男、神嶋利夫、五藤幸晴、幡谷竜太、鈴木郁夫、須藤忠恭、高遠 宏、大村明雄、清永丈太、近藤洋一、佐倉 朔、永塚鎮男、桑原拓一郎、佐々木俊法、野村 哲、田中正央、羽鳥謙三、大城逸朗、渡辺秀男、堀口萬吉、本郷美佐緒、白井太郎、磯 望、木谷幹一、小元久仁夫、犬塚則久、熊木洋太、古谷栄次郎、藤原 治、山田 哲、叶内敦子、神谷千穂、黒川勝己、門村 浩、小林 巖、宮脇明子、高野武男、内山美恵子・高、赤羽貞幸、笹川一郎、中里裕臣、鈴木正章、小橋拓司、春恒社・中山五男、小野 昭、萩谷千明、森江孝志、近藤洋一、西山賢一、山本裕之、池原 研、中川久夫、中川 猛、吉山 昭、山本 博、斎藤文紀、鎮西清高、成瀬 洋、池田重人、加藤芳朗、太田陽子、紀藤典夫、堀 和明、白石建雄、花岡正光、長岡信治、田中義文、及川輝樹、渡邊眞紀子、公文富士夫、北爪智啓、岡本 透、伊藤晶文、貞方 昇、前田保夫、平杜定夫、大場忠道、伊東徳治、苅谷愛彦、東郷正美、藤井理恵、菊地隆男、渡辺栄次、野口 淳、佐々木圭一、酒井治孝、豊蔵 勇、市川八州夫、百原 新、岡崎浩子、坂本順哉、馬場勝良、後藤秀昭、宇津川 徹、杉山真二、渡邊正巳、鈴木隆介、瀬川秀良、植木岳雪、小泉明裕、金 幸隆、創文印刷工業(株)、三好教夫、田村糸子、吉永秀一郎、林 和広、吉田明弘、渡辺哲也、吉田邦夫、杉田律子、石橋克彦、阪口 豊、菅 香世子、寺平宏、川本素行、小林 詢、渡辺秀男、高瀬克範、松下利秀、加藤幸弘、細野 衛、吉羽興一、武藤 章、松田清孝、真鍋健一、新里忠史、竹下欣宏、長谷川 正、小松美加、福島和彦、中尾賢一、岡田篤正、田村 博、長岡大輔、中村由克、嵯峨山 積、松原彰子、山根幹生、滝口志郎、鳥居雅之、邑本順亮、田中俊廣、松井理作、藤岡比呂志、田村俊和、前島勇治、宮崎 隆、久保田郁夫、雁沢好博、安川豊史、能城修一、羽鳥謙三、小林健助、兼子尚知、近藤鍊三、三宅 尚、田辺晶史、武田裕一、糸魚川淳二、柳 信一郎、小島夏彦、50周年記念Tシャツ寄付金、櫻尾重信、坂本隆彦、勝又麻須子、宮内崇裕、高濱信行、早船元峰、川瀬久美子、梅山 浩、金子拓男、梶間和彦、花谷育雄、赤松守雄、品川俊介、澁谷芳洋、杉山真二、副田宜男、五十嵐八枝子、森山昭雄、松葉千年、小林 淳、勝井義雄、金川和人、大龍昭智、阿部朝衛、田代尚利、千葉 崇、土 隆一、吉田圭一、浅野俊雄、坂井眞一、亀井裕幸、竹内貞子、山口雅功、西田泰民、三谷 豊、森永速男、研川英征、高濱信行、加藤定男、福富幹男、福岡 孝、松本俊幸、澤口敬恭、石井陽子、中村哲也、長谷川修一、高橋禎一、田原敬治、加藤茂弘、大石道夫、大平芳久、酒井哲也、(株)京都フィッシュントラック奥野博子、小池裕子、佐瀬 隆、市川桂子、パリノサーヴェイ株式会社、成瀬敏郎、三浦英樹、青柳章一、木村克己、吾妻 崇、日下部 寧、高遠 宏、御堂島 正、岡田 肇、米田 穰、初倉克幹、菅沼悠介、増田富士雄、長谷川善和、増田富士雄、大里重人、大井信三

以上 369名 敬称略 賛助会員

* 2008年7月21日現在

* お名前は募金時期の順に示しました。

* 同じお名前が複数回でてくる方がおられますが誤りではありません。

博物館連絡委員会報告（松島義章委員長）

学会 50 周年記念展示を、下表のとおり 2006 年 7 月 14 日の豊橋市自然史博物館をスタートとして、2007 年 11 月 4 日の神奈川県立生命の星・地球博物館まで、8 博物館で開催した。期間中の入館者数は総計 195,107 名となり、日本第四紀学会の活動の一端を紹介できた。博物館連絡委員会は、2008 年 3 月末をもって終了。

展示施設	特別展 / 企画展名称	展示期間	観覧者数 (人)	備考
豊橋市自然史博物館	市制施行 100 周年記念特別企画展「恐竜と生命の大進化—中国雲南 5 億年の旅—」	2006 年 7 月 14 日(金) ～ 10 月 9 日(月・祝) (77 日間)	46,861	豊橋市自然史博物館 特別企画展示室 有料(大人 500 円、小中学生 200 円)
兵庫県立人と自然の博物館	ミニ企画展「自然史からみた兵庫の海」	2006 年 9 月 9 日(土) ～ 11 月 5 日(日) (50 日間)	6,134	開催場所：人と自然の博物館 3F 小企画展示室 入場料無料(通常の観覧料のみ)
産業技術総合研究所 地質標本館	人類と社会の未来をつなぐ地質時代 —日本の第四紀研究 50 年—	2006 年 10 月 3 日(火) ～ 11 月 12 日(日) (36 日間)	5,288	開催場所：地質標本館 1F ロビー 入館料無料 / 無料小冊子配布(展示パネルを A4 にしたものの)
大阪市立自然史博物館	日本第四紀学会 50 周年記念展示	2006 年 12 月 1 日(金) ～ 2007 年 1 月 31 日(水) (47 日間)	10,031	開催場所：自然史博物館本館 2F ギャラリー 入場料無料(通常の観覧料のみ)
千葉県立中央博物館	トビックス展「日本第四紀学会創立 50 周年記念展示」	2007 年 3 月 23 日(金) ～ 5 月 27 日(火) (58 日間)	13,736	常設展示「房総の歴史展示室」前 入場料無料(通常の観覧料のみ)
青森県立郷土館	第 2 回北東北三県共同展 北東北自然史博物館「大地と生きものふしぎ旅行」	2007 年 6 月 9 日(土)～ 7 月 16 日(月) (38 日間)	3,899	有料(ただし、第四紀学会展示を行なったエントランスホールは特別展料金でなくても観覧可能)
兵庫県立人と自然の博物館	企画展「瀬戸内海のいまとむかし」	2007 年 7 月 7 日(土) ～ 9 月 24 日(月) (69 日間)	32,135	開催場所：人と自然の博物館 2F 企画展示室 入場料無料(通常の観覧料のみ)
神奈川県立生命の星・地球博物館	特別展「ナウマンゾウがいた ～温暖期の神奈川～」	2007 年 7 月 21 日(土) ～ 11 月 4 日(日) (100 日間)	77,023	神奈川県立生命の星・地球博物館 特別展示室 観覧料有料(200 円)
		合計:	195,107	

INQUA 執行委員会および関連事業に関する報告 (日本第四紀学会 INQUA 執行委員会組織員会: 奥村晃史・三田村宗樹・横山祐典・宍倉正展)

1) 房総巡検

3月31日東京から貸し切りバスで日帰り巡検を実施した。見学地点は(1)君津市大岩、小糸川河岸の上総層群黄和田層Kd38層準と鮮新統-更新統境界、(2)千倉町平磯、大正地震隆起ベンチと、元禄地震タイプ段丘、およびその前縁の大正地震タイプベンチ、(3)南房総市岩井の隆起ビーチリッジにみられる大正地震タイプ隆起の繰り返し。12名参加。前半は冷たい雨、平磯では寒風の中活発な議論をおこなった(担当者: 奥村晃史・宍倉正展)。

2) 日本学術会議INQUA分科会・INQUA国内委員会とINQUA執行部との意見交換会

4月2日午後4時から1時間余り、日本学術会議INQUA分科会の一環として意見交換会開催し、第四紀定義問題や、アジアのINQUAへの参加について議論した。

3) INQUA分科会・INQUA国内委員会主催レセプション

4月2日夕方東京・平河町の都市センターホテルすばるの間において、INQUA執行部関係者14名、日本からの参加者16名で立食パーティーを開き、第四紀学に関するさまざまな話題について歓談した。

4) INQUA執行部による東京シンポジウム
4月4日13時~17時、東京大学地震研究所1号館セミナー室において、INQUA執行部5名と横山祐典氏によるシンポジウム『第四紀研究のフロンティア』を開催した。発表者は奥村晃

史、Pete Coxon、Allan Ashworth、横山祐典、Sandy Harrison、Brad Pillans。参加者は50名あまり(担当者: 横山祐典・三浦英樹)。

5) INQUA執行部による大阪講演会

INQUA幹事団のうちAlan Chivas、Margaret Avery、Marie-France Loutre、Cecile Baetemanの4名が4月4日13時~17時、大阪駅前的大阪市立大学文化交流センター大セミナー室で講演会を実施した。講演会は、「第四紀国際学術講演会」として日本第四紀学会・日本地質学会近畿支部・日本応用地質学会関西支部の3団体の共催で実施された。講演会では、日本第四紀学会の熊井前会長を含めて上記の方々に5講演(各40分)が行われた。参加者は、大阪・神戸・京都だけでなく名古屋などの遠方からも参集頂き、研究者・学生を中心に38名の参加が得られた(担当者: 三田村宗樹)。

6) 琵琶湖巡検

4月5日大阪講演会参加者と奥村が琵琶湖西岸の一日巡検を行った。堅田丘陵の地形と古琵琶湖層群、段丘地形の発達、比良山麓の扇状地と湖畔の堆積物等について観察・議論を行った(担当者: 奥村晃史・里口保文)。

7) 会計報告

房総巡検バス借料、通行料、案内者(宍倉)交通費、地震研究所会議室使用料、琵琶湖巡検レンタカー借料として、日本第四紀学会から123300円の支援を受けた。

(奥村晃史)

日本学術会議地球惑星科学委員会INQUA分科会・INQUA国内委員会報告

1) INQUA国内委員会会合

日時: 2007年9月1日、会場: 神戸大学百年記念館

主な審議事項: INQUA大会報告(斎藤文紀)、INQUA大会間の国内委員会体制(斎藤文紀委員長)、2008年春のINQUA執行委員会日本開催への対応、INQUAコミッションのプロジェクト提案・研究集会開催、日本第四紀学会50周年記念国際シンポジウムへの取り組み。

2) 地球惑星科学委員会国際対応分科会(第20期・第4回)

日時: 2007年11月1日、会場: 日本学術会議
主な審議事項: 平成20年代表派遣候補者募集、分科会・小委員会の活動状況報告体制の確立、組織の見直し(小委員会の一部を分科会に分

属、幹事組織設置)

3) 日本学術会議国際対応委員会ヒヤリング
日時: 2007年11月19日、会場: 日本学術会議
日本学術会議が加盟している国際学術団体とそれに対応する国内組織の活動状況等について、将来の加盟団体・分担金見直しの基礎データを得るためのヒヤリングが行われ、奥村晃史INQUA分科会委員長が、INQUA、INQUA分科会と国内委員会、および日本の第四紀研究者の活動状況について説明した。日本の第四紀研究の国際的発信、国際的研究でのリーダーシップの発揮、および、日本学術会議の事業の一部としての国際活動を強調すること等を要請された。

4) 地球惑星科学委員会INQUA分科会(第20

期・第2回)

日時：2007年12月26日、会場：日本学術会議
 主な審議事項：INQUA 国内委員会の新体制、平成20年度代表派遣候補選考、INQUA プロジェクト提案(2件準備中) INQUA 執行委員会対応、第21期会員・連携会員の推薦、国際対応分科会報告、国際対応委員会ヒヤリング報告、国際シンポジウム報告、2015年INQUA招致の検討、2008年国内活動の検討。Quaternary International 特集号の提案。

5) INQUA 執行委員会の日本開催・関連事業
 日時：2008年4月1日～3日、会場：日本学術会議、参加者：執行部全員とコミッション委員長、関連行事：関東南部巡検(3月31日)、INQUA 分科会における意見交換会とレセプション(4月2日)、ミニシンポジウム(4月4日午後、東京・大阪同時開催)、琵琶湖巡検(4月5日)、日本第四紀学会 INQUA 執行委員会組織員会報告参照。

6) 地球惑星科学委員会INQUA分科会(第20期・第3回)

日時：2008年4月2日 会場：日本学術会議
 2008年活動計画、2015年 INQUA 招致について議論を行った後、INQUA 執行部との意見交換会を行い、アジアでの第四紀研究普及や第四紀定義問題について議論した。

7) 地球惑星科学委員会国際対応分科会(第20期・第5回)

日時：2008年4月21日、会場：日本学術会議
 主な報告・審議事項：平成20年度代表派遣選考結果(IUGS 代表とは別に第33回 IGC に INQUA 分科会から奥村晃史を派遣)、日本学術会議の国際対応の今後の方向(日本の地位向上のための財政的基盤、情報収集力の向上)、20期の国際対応の記録作成、21期に向けての国際対応体制についての意見交換。

8) 第20期の成果のとりまとめ
 地球人間圏分科会提言『陸域-縁辺海域における自然と人間の持続可能な共生へ向けて』、地球惑星圏分科会記録『地球惑星科学の現状と課題』のとりまとめが進められている。これらの提言・報告には地球環境変動、災害、近未来予測など第四紀学に密接な内容が多く盛り込まれている。また、国際対応分科会記録『地球惑星科学における国際対応の現状と課題』には INQUA 分科会の活動報告が収められる。

9) 地球惑星科学委員会INQUA分科会(第20期・第4回) 2008年8月開催予定

10) 日本学術会議の後援による研究集会
 日本第四紀学会50周年記念事業 国際シンポジウム『アジア・西太平洋の第四紀-環境変化と人類-』、2007年11月19日～22日、産業技術総合研究所つくばセンター。

「東アジアにおける酸素同位体ステージ3の環境変動と考古学」、2008年6月21日～22日、首都大学東京

(奥村晃史)

2008年第1回評議員会議事録

日時：8月22日(金) 17:30 - 20:10

場所：東京大学理学部1号館336教室

議長：辻 誠一郎

出席：遠藤邦彦(副会長)、吾妻 崇、池田明彦、池原 研、石橋克彦、犬塚則久、井内美郎、岩田修二、大場忠道、岡崎浩子、小野 昭、菊地隆男、久保純子、公文富士夫、佐藤宏之、鈴木毅彦、辻 誠一郎、陶野郁雄、長友恒人、長橋良隆、兵頭政幸、松下まり子、松島義章、三浦英樹、水野清秀、百原 新(出席26名、委任状14通)このほか町田 洋(会長)と説明者として奥村晃史(日本学術会議連携会員)、斎藤文紀(学会賞受賞者選考委員会委員長代理)、幹事として苅谷愛彦が出席。

記録：百原 新

鈴木毅彦行事幹事の司会で、町田会長あいさつの後、辻 誠一郎評議員を議長に選出し、配付資料に基づき下記報告・審議を行った。

報告事項

1. 2007年度事業報告

1-1 庶務(庶務幹事 百原 新・吾妻 崇)

1) 会員動向(2008年7月31日現在):

正会員1,473名(うち学生会費会員67名、海外会員

10名を含む)、名誉会員13名、賛助会員12社。逝去会員：永井節治(2007年8月)細内伸彦(2007年10月)堀江正治(2008年7月)(参考)2007年7月31日現在の正会員1636名(うち学生会費会員62名、海外会員22名を含む)、名誉会員13名、賛助会員12社。逝去会員については中川久夫名誉会員(2008年8月)、吉川虎雄名誉会員(2008年8月)もあわせて報告し、黙祷をささげた

2) 会費未納者に対する確認作業と3回の振り込み依頼を行い、返事がなかった5年以上の会費滞納者116名の除籍手続きを6月末に行った。それに基づき、2008年度の会誌および第四紀通信の発行部数の調整を行った。

3) 総会・評議員会・幹事会の開催：2007年度第1回評議員会を2007年8月1日に神戸大学百年記念館において開催した。出席者28名(説明者3名を含む)、委任状14通。議長：菊地隆男。2007年度総会を2007年9月1日に神戸大学百年記念館において開催した。出席者63名、委任状133通。議長：三田村宗樹。これらの議事録は「第四紀通信」14巻5号に掲載した。2007年度第2回評議員会を2008年2月2日に東京大学本郷キャンパスにおいて開催した。出席者25名、委任状15通、議長：山崎晴雄。議事録は「第四紀通信」15巻2号に掲載した。このほか、幹事会を計9回開催し、議事録をそ

れぞれ「第四紀通信」に掲載した。

4) 転載許可の受付(17件)と寄贈図書の受付(12冊)を行った。リポジトリ登録許可依頼の受付(2件)を行った。

5) 学会・シンポジウム等の共催・後援を行った: 北淡活断層シンポジウム2008(後援、2008年1月12~13日)、日本活断層学会「能登半島地震1周年シンポジウム」(後援、2008年5月18日)、2008年度日本旧石器学会(共催、6月21~22日)、神奈川県生命の星・地球博物館夏期特別展「箱根火山、いま証される噴火の歴史」(後援、2008年7月19日~11月9日)、第52回粘土科学討論会(共催、2008年9月3~5日)、北海道開拓記念館第64回特別展「古代北方世界に生きた人々 - 交流と交易 - 」(後援、2008年9月12日~11月3日)、明治大学博物館特別展示「氷河時代の山をひらき海をわたる - 日本列島人類文化のパイオニア - 」(後援、2008年10月10日~12月12日)、第13回国際花粉学会議(IPC-XIII)および第9回国際古植物学会議(IOPC-IX)日本招致委員会(後援、2012年8月)。

6) 2008年日本第四紀学会賞および学術賞選考に向けて、学会賞受賞者選考委員の選挙を行なった。町田会長から推薦された10名の候補者から評議員による選挙によって選ばれた小野 昭、齋藤文紀、大場忠道、小泉武栄、真野勝友が委員となり、委員の互選により真野勝友委員が委員長に就任した。学会賞と学術賞の選考を委嘱した。

7) 2008年日本第四紀学会論文賞および奨励賞選考に向けて、論文賞受賞者選考委員の選挙を行なった。町田会長から推薦された11名の候補者から評議員による選挙によって選ばれた者のうち、辞退者(稲田孝司、松島義章)を除く、井内美郎、犬塚則久、池田安隆、久保純子、鈴木三男の5名が委員となった。委員の互選により選ばれた犬塚則久委員が委員長に就任した。論文賞と奨励賞の選考を委嘱した。

8) 幹事会で2008年日本第四紀学会功労賞の選考を行った。

9) INQUAのCommission、International focus groupなどのプロジェクトに対応した研究委員会活動を募集し、5件の申請を確認した。第2回評議員会での承認を受け、支出を含めた年間計画書の提出を依頼し、それをもとに予算配分を検討した。大会シンポジウム等での成果発表を要請するといった、成果の還元方法について検討を行った。

10) 知的財産等検討委員会からの答申を踏まえ、会則改訂や講演要旨集の論文集化等の検討を行った。

11) 日本ジオパーク委員会への支援体制について協議を行った。

12) 評議員会メーリングリストの作成について検討を行った。

13) 第四紀学会経理手続き内規案の検討を行った。

14) 日本学術振興会への科研費審査委員候補者については本年度の情報提供は見送ることとし、推薦方法を今後検討することとした。

15) 科学研究費(研究成果公開促進費)を申請した(不採択)。

16) 国際地理オリンピック支援のための寄付を

行った。

1-2 行事(行事幹事 鈴木毅彦)

1) 日本第四紀学会2007年大会を神戸大学百年記念館において2007年8月31日~9月2日に開催した。8月31日~9月1日に一般研究発表を行い、口頭35件(キャンセル1件を含む)、ポスター34件、合計69件の研究発表が行われた。また、31日夕方に評議員会、1日に総会を行った。9月2日には、シンポジウム「瀬戸内海の変遷 - 自然、環境、人」を開催し、11件の発表が行われた。1日の午後には、一般研究発表会と同時進行で、神戸大学瀧川記念学術交流会館にて、公開講座「大地の変動と地震・津波」が神戸大学都市安全研究センター・神戸大学内海環境教育研究センターとの共催、兵庫県立人と自然の博物館の協力の下、開催された。さらに今回は、「中越沖地震・能登半島地震」に関する緊急セッションが31日昼休みの時間帯に急遽追加され、日本活断層学会設立準備委員会、日本地理学会災害対応委員会の後援をうけて進められ、趣旨説明を含めて3件の口頭発表、8件のポスター発表が行われた。大会の参加者は、3日間を通して、219名(会員154名、非会員65名)であった。また、9月3日~4日にかけては、「淡路島と東播磨平野の大阪層群および高位段丘層と活断層地形」と題する巡検が行われ、13名が参加した。

2) 日本第四紀学会2008年大会の準備を、国立極地研究所と開催地である東京大学の関係者を中心に進めた。開催期間は2008年8月22日~24日、開催場所は東京大学本郷キャンパス理学部1号館小柴ホール。8月22日~23日に一般研究発表(口頭及びポスター)、8月24日にシンポジウム「第四紀後期の気候変動と地球システムの挙動 - その原因とメカニズムの解明に向けて - 」が行われる。また8月22日~23日には緊急セッション「岩手・宮城内陸地震」(ポスター発表)を実施することを決めた。さらに8月25日~26日には巡検「関東東部沿岸域の地質・地形・人間活動」が予定されている。そのほか11月16日には一般市民を対象とした普及講演会「極限のフィールドワーク: 南極観測からわかる地球環境変動の過去と未来」(国立極地研究所・国立科学博物館との共催)が、国立科学博物館日本館2階講堂において開催される。

3) 日本第四紀学会2009年大会開催地とシンポジウム内容について検討を行った。滋賀県立琵琶湖博物館のスタッフを中心として現在検討中であり、2009年8月に滋賀県立琵琶湖博物館において大会を実施することで調整中である。

1-3 編集(編集幹事 岡崎浩子・公文富士夫)

1) 第四紀研究第46巻5号(論説2編、短報1編、資料2編、書評1編、46ページ)、6号(特集「津波堆積物と地震性タービダイト: 防災・減災のための堆積物記録の理解」; 論説3編、総説6編、97ページ)、第47巻1号(論説3編、短報2編、書評1編、70ページ)、2号(論説2編、短報1編、書評2編、特集「2005年度日本第四紀学会シンポジウム「大都市圏の地盤 - 私たちの生活とのかかわり - 」(その

1); 論説2編、短報1編、72ページ) 3号(論説3編、短報1編、書評2編、特集2005年度日本第四紀学会シンポジウム「大都市圏の地盤 - 私たちの生活とのかかわり - 」(その2); 論説2編、78ページ) 4号(「瀬戸内海の変遷 自然、環境、人」特集号; 論説5編、短報1編、76ページ)の合計6冊439ページを刊行した。前年度とほぼ同じである。前年度と引き続き比較的多い印刷ページは、三つの特集・特集号の刊行によるところが大きい。

2) 神戸大会特集号(論説6編)は第47巻4号にて刊行された。

3) 7月18日現在、受理済み論文は8編(論説7編、短報1編)で第47巻5号以降に順次掲載の予定である。なお、第47巻5号にはINQUA報告が入る予定である。また、手持原稿は12編(論説:8編、短報:4編)である。論文投稿数は、2008年に入ってから10編(書評を除く)で、昨年の同時期(17編)よりもかなり少ない。2007年の投稿件数は40編(うち特集・特集号原稿21編)であり、2006年(39編)よりも微増した。2005年に入ってから目立つようになった論文投稿数の減少はさらに拍車がかかっており、特集・特集号原稿が半数を占めるようになった。また、取り下げ・掲載不可となったのは2編であり、昨年の6編より減少した。一方で、投稿受付から刊行までにかかった時間は、短いもので9か月程度であり、昨年よりやや長くなった。

4) 編集状況や問題点は「編集委員会だより」を通じて、会員に知らせるように努めた。また、完成度の高い論文の作成を「編集委員会だより」にて呼びかける一方、2004年山形大会から編集委員会ブースを設け、原稿の受付から刊行に至る流れや分かりやすく明解な図表の作り方などを解説してきた。2008年大会においても同様の活動を行うこととした。

5) J-STAGEによる電子ジャーナル化を行っている。現在45巻1-6号、46巻1、2号が閲覧可能である。刊行後1年以内の号についての全文検索は、会員のみ利用可能であり、IDとパスワードにて管理される。アブストラクトと刊行後1年以上経過した号については、会員外も含めて利用可能である。

6) 「執筆要項」の見直しをおこなった。(本誌「第四紀研究執筆要項改定」参照)

1-4 広報(広報幹事 荻谷愛彦)

1) 「第四紀通信(QR News Letter)」Vol.14 No.5(2007年10月) 同No.6(2007年12月) Vol.15 No.1(2008年2月) 同No.2(2008年4月) 同No.3(2008年6月) および同No.4(2008年8月)を刊行した。

2) 「第四紀通信」Vol.14 No.5、同No.6、Vol.15 No.1、同No.2、同No.3および同No.4(いずれもpdf版)を、それぞれ発行前月の中旬に日本第四紀学会ホームページに掲載した。

3) 学術情報センターサーバ上の日本第四紀学会ホームページを通じて各種の広報・普及活動を行った。主なものは、「第四紀通信(pdf版)」の掲載のほか、2007年大会緊急セッションの講演要旨公開、本学会主催のシンポジウムおよび講習会案

内、本学会大会案内、だいよんきQ and A掲載、各種公募・助成記事の掲載、各種イベント情報(研究集会等)の掲載、「第四紀研究」の目次掲載、などである。

4) 第四紀学会会員メーリングリストを通じて、シンポジウム、研究集会および公募・助成等の連絡や広報を行った。また2008年4月下旬から5月上旬にかけてメーリングリスト・サーバの移転を行い、(株)春恒社のサーバを利用した新体制(通称: jaqua-ml)での運営を開始した。2007年9月~2008年7月中旬のメーリングリスト投稿数は約90件である。2008年7月中旬の登録会員数は約950名である。

5) 第四紀学会幹事会メーリングリストを通じて、各種連絡や議論を行った。また2008年4月下旬から5月上旬にかけてメーリングリスト・サーバの移転を行い、(株)春恒社のサーバを利用した新体制(通称: jaqua_k07-ml)での運営を開始した。登録者は全幹事と奥村会員、および事務局である。

1-5 渉外(渉外幹事 三浦英樹)

1) 日本地球惑星科学連合: 2007年11月6日、東京大学理学部で第6回評議会が開催され、新規加盟学会、運営会議活動、将来構想委員会中間答申(法人化後の連合体制)の報告、日本地球惑星科学連合第3期(2006年10月~2007年9月)決算報告および第4期(2007年10月~2008年9月)予算案が承認された[三浦英樹代理出席] 2008年3月14日、東京大学理学部で第7回(拡大)評議会が開催され、1) 国際地学オリンピック日本委員会、2) AOGS2010年大会共同開催について、3) 次期指導要領についてのパブリックコメント提出、4) 2008年連合大会についての報告、将来構想委員会からの第2次答申(日本地球惑星科学連合法人化)についての報告のあと、質疑応答が行われた[町田洋、遠藤邦彦、奥村晃史、三浦英樹出席] 2008年5月28日、幕張メッセ国際会議場で第8回評議会が開催され[町田洋、奥村晃史出席] 将来構想委員会の最終答申を受けて地球惑星科学連合の法人化のための準備委員会の発足を決定(準備委員会委員長は浜野洋三)、次期評議会議長の選出(平原和朗日本地震学会会長) 2009年大会は2009年5月16日~21日に幕張メッセ国際会議場で開催することを決定した。2008年連合大会会期中にはこの他にプログラム委員会、国際委員会、男女共同参画委員会、教育問題検討委員会等が開催された。2008年7月4日、東京大学理学部で第1回法人化準備会が開催され、日本地球惑星科学連合将来構想委員会最終答申と一般社団法人日本地球惑星科学連合定款(案)について報告があり、各学会推薦委員が5つのワーキンググループ(財務WG(財務計画、会費)、会員管理WG(組織運営、選挙制度)、セクション制度(学術の将来展望)(宇宙惑星科学、大気海洋・環境科学、地球人間圏科学、固体地球科学、地球生命科学、地球惑星科学総合)、大会運営事業計画WG(連合の事業計画)、ジャーナル発行事業計画WG(連合の事業計画))のどれかに所属することとなった[出席なし委員長一任]

2) 日本地球惑星科学連合 2008 年大会が 2008 年 5 月 25 日～30 日に幕張メッセで開催され、135 件のセッションに対して 3,218 件の発表があり、約 5,000 名の方が参加した。日本第四紀学会が単独でセッション提案母体となっている『第四紀』、日本地質学会と共同開催で提案している『沖積層研究の新展開』、日本地質学会・日本地震学会と共同開催で提案している『活断層と古地震』の各セッションが開催された。

3) 自然史学会連合：平成 19 年度の連合の講演会「いきもの・ひと・みずの自然史」が 2007 年 11 月 25 日に滋賀県立琵琶湖博物館で開催された。2007 年 12 月 16 日に国立科学博物館で 2007 年度総会が開催された。講演会の開催、ロレックス・インスティテュートが行うロレックス賞 (<http://www.rolexawards.jp>)への応募の呼びかけ、博物館部会、ホームページの維持管理についての報告に続いて、2006 年度決算、2007 年度会計経過報告、2008 年度予算案、連合代表（中央大学の西田治文氏・日本植物分類学会）の再任、運営委員・役員の変更について審議承認された。

4) 「地質の日」事業推進委員会：2007 年 8 月 22 日に産総研臨海副都心センター別館で第 1 回地質の日事業推進委員会が開催された。経緯説明に続いて、委員長：東京地学協会の中尾征三氏、副委員長：神奈川県立生命の星・地球博物館の平田大二氏および産総研地質調査情報センターの栗本史雄氏を選出、本委員会の正式名称を「地質の日事業推進委員会」とすることが承認され、今後の活動方針および資金問題について議論が行われた。

5) ジオパーク委員会報告：ジオパークは地球上のさまざまな地質遺産を保護・研究し、地域の持続的な発展を図ることを目的とするユネスコの支援を受けた構想である。すでにヨーロッパ、中国を中心に活動が始まっている。日本でも日本ジオパーク委員会が設立されることになり、その第 1 回委員会が 5 月 28 日に開かれた。この委員会は産総研地質調査総合センターに置かれ、関連学協会から推薦された 11 名の委員からなり、日本および世界ジオパークネットワークへの加盟、申請の審査、認定、推薦、活動の評価、推進に関わる提言を行う。今回は委員長（尾池）、副委員長（町田）が選ばれ、活動方針を審議した。その結果日本では火山・地震・洪水などの地質現象が活発である地域の特色を生かして、「生きたジオパーク」という特色を出すべきであること、世界ジオパークネットワークに対しても同様の趣旨の提言をすることなどが決まった。目下多くの地域からジオパーク応募に向けての活動が盛んに行われている。

1-6. 企画（企画幹事 佐藤宏之）

1) 学会主催のシンポジウム「考古遺跡から何がわかるか?：Geoarchaeology」を、2008 年 2 月 2 日午後、東京大学法文 2 号館にて開催した。世話人は、佐藤宏之・出穂雅実会員で、地考古学の意義、平野部における弥生～中世の遺跡形成、旧石器遺跡の地考古学的分析等に関する会員内外 5 名の講演と会員 2 名によるコメントおよび総合討論が行われ

た。シンポジウムの内容については、『第四紀研究』に特集号として掲載する方向で準備が進められており、現在原稿執筆依頼中である。

2) 2006 年 1 月に実施した学会主催のシンポジウム「大都市圏の地盤と私たちの生活とのかかわり」の特集原稿 5 編が、『第四紀研究』47 巻 2 号・3 号(2008 年)の 2 冊に掲載された。

3) 第 13 回の講習会「土器の野焼きと調理に関する実験考古学」を、2008 年 6 月 7 - 8 日の 2 日間、東北芸術工科大学(山形県山形市)を会場に、東北芸術工科大学考古学研究室・野焼き研究会との共催で実施した。世話人は、北野博司氏(東北芸術工科大学教授)で、初日に土器の野焼き技術・使用形態、土器付着炭化物の分析等に関する会員内外 4 名の講演を行った。2 日目は土器の野焼きと調理実験、土器付着炭化物のサンプリング等を行い、実験経過の観察・記録作成を参加者で行った。参加者は 53 名である。

2. 2007 年度決算報告・会計監査報告（本誌資料 1、「2007 年度収支決算報告書」、資料 2「貸借対照表」、資料 3「2007 年度会計監査報告書」、資料 5「2007 年度業務委託費」参照）

吾妻会計幹事より配付資料に基づき説明があった。配布資料のうち、支出の部予稿集印刷費の摘要、別冊の部数 150 部の記載を 350 部に修正した。続いて、2007 年度の会計が適正に運用されていたことを確認した旨、松島会計監査より報告された。

3. 研究委員会報告（本誌「2007 年研究委員会活動報告」参照）

本年度に募集して承認された、地球温暖化問題を検討する研究委員会（代表者：陶野郁雄）、東アジアにおける酸素同位体ステージ 3 の環境変動と考古学研究委員会（代表者：小野 昭）、気候変動研究委員会（代表者：公文富士夫）、テフラ・火山研究委員会（代表者：長岡信治）、古地震・ネオテクトニクス研究委員会（代表者：吾妻 崇）の 5 委員会について資料により研究活動と研究計画についての報告があり、テフラ・火山研究委員会については鈴木毅彦会員により、その他の委員会については各代表者より説明が行われた。

東アジアにおける酸素同位体ステージ 3 の環境変動と考古学研究委員会の計画については、INQUA コミッションに対応して 2010 年に成果を出すよう要請があった。

4. 知的財産権等に関連した会則改訂・講演要旨集の論文集化等に関する検討結果報告

水野清秀幹事長より以下の報告が行われた。

2006 年度の知的財産権等検討委員会からの答申を受けて、会則に罰則規定を設けるかどうか、法務委員会を設置するかどうか、また講演要旨集の著作権をどのようにするのか、論文集化するかどうかの検討を幹事会において行った。

1) 知的財産権等検討委員会から提出された会則改訂案について検討し、委員会から指摘された会則の全般的な不備についてはひとまず保留し、会員の除

籍・除名に関する条項を優先的に改正することとした。2007年8月の評議員会及び総会、2008年2月の評議員会での意見を参考に、会費長期滞納者については除籍、重大な倫理違反者については除名とすることができる項目を追加することにした。また第四紀通信にて意見を求めたが、特に反対意見がなかったことから、2008年8月の評議員会・総会にて会則改訂案を提案することにした。除名等を検討する法務委員会設置案に対しては、対象となる申立が極めて低頻度で発生するとみられる一方で、委員会の責任は重く、外部の専門家に加わってもらう必要があることから、これを常設で維持することは難しいという意見が多かった。むしろ申立があった場合に、早急に評議員会を招集して法務委員会を設置できるように、その設置基準や除名判断の基準となる細則をあらかじめ決めておく必要があると考えられ、2月の評議員会時に幹事会案を提示し、議論を行った。その時に指摘された問題点を踏まえ、幹事会案を修正し、8月の評議員会において修正案を提示することとした。各規約案は知的財産権等検討委員会が提示した案の最低限必要な部分を取り込んだ内容となっていることから、修正案を再度検討委員会に諮問することは行わなかった。

2) 講演要旨集の論文集化ならびに学会への著作権等譲渡については、引き続き、時間をかけて検討することとしたが、講演要旨作成における知的財産権の侵害が発生しないように、2008年大会分から発表者に下記の要望をすることにした。すなわち、著作権は基本的には発表者にあるとするが、引用した文献は出典がわかるように明記すること、転載された図表などについては許可が得られていること、学会の名誉を傷つけたり信用を毀損するような表現・その他倫理憲章に反するものを含まないこと、問題が発生した場合の責任は発表者が全て負うことなどである。この方針は2月の評議員会において承認された。

5. 50周年記念事業実行委員会報告(本誌 50周年記念事業実行委員会報告 参照)

水野清秀幹事長より代理報告があった。

6. 博物館連絡委員会報告(本誌 博物館連絡委員会報告 参照)

松島義章委員長より報告があった。

7. 日本学術会議地球惑星科学委員会 INQUA 分科会・INQUA 国内委員会報告(本誌 日本学術会議地球惑星科学委員会 INQUA 分科会・INQUA 国内委員会報告参照)

奥村晃史会員より報告があった。

8. INQUA 執行委員会および関連事業に関する報告(本誌 INQUA 執行委員会および関連事業に関する報告 参照)

奥村晃史会員より報告があった。

審議事項

1. 2008年度事業計画(2008年8月1日～2009年

7月31日)

水野幹事長より配付資料に基づき説明があり、いずれも承認された。

1-1 庶務

- 1) 会員名簿の管理を行う。
- 2) 総会・評議員会・幹事会を開催する。
- 3) 役員選挙を行う。
- 4) 転載許可・受け入れ図書の整理を行う。
- 5) 学会・シンポジウム等の共催・後援に関連する業務を行う。
- 6) 論文賞受賞者選考(論文賞・奨励賞)に関する業務を行う。
- 7) 学会賞受賞者選考(学会賞・学術賞)に関する業務を行う。
- 8) その他学会活動に関する庶務業務を行う。

1-2 会計

- 1) 研究委員会の予算の調整を行う。
- 2) その他会計に関する業務を行う。

1-3 行事

- 1) 2008年8月22日～24日に東京大学本郷キャンパス理学部1号館小柴ホールを会場として、日本第四紀学会2008年大会を実施する。
- 2) 日本第四紀学会2009年大会を2009年8月滋賀県にて開催する予定で、滋賀県立琵琶湖博物館のスタッフを中心として検討し、その準備を行う。
- 3) 2010年日本第四紀学会大会の開催地選考の準備を行う。

1-4 編集

- 1) 「第四紀研究」第47巻5号、6号、第48巻1号、2号、3号、4号を編集し、定期刊行する。また、J-STAGEを通じて、電子ジャーナルとしての刊行を行う。
- 2) 2008年大会シンポジウム特集号編集委員会を設置し、企画・編集などにあたる。
- 3) 「第四紀研究」編集・出版に関わる諸課題を整理し、順次その検討・見直しを進め、可能なものから改善を実施する。

1-5 広報

- 1) 「第四紀通信(QR News Letter)」Vol.15 No.5(2008年10月)、同No.6(2008年12月)、Vol.16 No.1(2009年2月)、同No.2(2009年4月)、同No.3(2009年6月)および同No.4(2009年8月)を刊行する。
- 2) 「第四紀通信」Vol.14 No.5、No.6およびVol.15 No.1、No.2、No.3、No.4(いずれもpdf版)を、それぞれ発行前月の中旬に日本第四紀学会ホームページに掲載する。
- 3) 学術情報センターサーバ上の日本第四紀学会ホームページを通じて各種の広報・アウトリーチ活動を行う。
- 4) 第四紀学会会員メーリングリストを通じて、シンポジウム、研究集会および公募・助成等の広報活動を行う。
- 5) 第四紀学会幹事会メーリングリストを通じて、

各種連絡や議論を行う。

1-6 渉外

1) 日本地球惑星科学連合大会を引き続き共催し、日本第四紀学会が単独でセッション提案母体となっている『第四紀』、日本地質学会と共同開催で提案している『沖積層研究の新展開』、日本地質学会・日本地震学会と共同開催で提案している『活断層と古地震』の各セッションを継続するとともに、新規セッションの開催、共催、古環境変動に関連するセッションの統合を推進する。

2) 日本地球惑星科学連合の加盟学会として、関連他学会と協調して活動をすすめる。

3) 第四紀学会としては、加盟学会連合である自然史学会連合、地質科学関連学協会、地球環境科学関連学会協議会、「地質の日」事業推進委員会に積極的に参加し、その活動の一翼を担う。

4) 国際惑星地球年(IYPE)に関する国内委員会の活動を行う。

1-7 企画

1) 1月または2月の評議員会に合わせて、シンポジウムを開催する。テーマや場所については検討中である。

2) 年度内に講習会を2回程度開催する。秋に東京都埋蔵文化財センターとの共催で考古学関係のテーマで実施することを計画中である。また大型植物化石に関する講習会も実施する予定である。

2. 2008年度予算案(資料4「2008年度予算案」、資料6「2008年度業務委託費見積」参照)

吾妻会幹事より配付資料に基づき説明があり、承認された。

3. 学会賞規定及び学会賞と学術賞選考に関する内規改訂の提案

学会賞及び学術賞受賞候補者の対象について、正会員のみ限定するという資料9「日本第四紀学会学会賞規定」、及び資料10「日本第四紀学会学会賞と学術賞選考に関する内規」の各改訂案の提案について、水野幹事長より説明が行われた。議論の結果、「学会賞と学術賞に関する内規(改訂案)」の第3項を削除すること、及び「名誉会員候補者選考規定」の見直しをすることを条件に、改訂案は承認された。また選考委員会委員の選考と受賞候補者選考のスケジュールについては再度検討することとした。

4. 学会賞・学術賞受賞者の決定について

日本第四紀学会学会賞受賞者選考委員会(委員長代理の斎藤文紀委員)から受賞候補者選考結果報告があり、学会賞受賞者2名(大場忠道会員、松島義章会員)、学術賞受賞者2名(五十嵐八枝子会員、横山祐典会員)を決定した。(受賞理由は本紙「2008年日本第四紀学会賞・日本第四紀学会学術賞」参照)

5. 論文賞・奨励賞受賞者の決定について

日本第四紀学会論文賞・奨励賞受賞者選考委員会

が第四紀学会宛に答申した受賞者選考結果が、資料に基づいて犬塚則久委員長によって報告され、論文賞受賞1件(著者の澤井祐紀会員は奨励賞の副賞も受賞)、奨励賞受賞者2名(副田宜男会員、植村立会員)を決定した。(受賞理由は本紙「2008年日本第四紀学会論文賞・奨励賞」参照)

6. 功労賞受賞者の決定について

幹事会で選考した受賞者選考結果を、資料に基づき水野幹事長が報告し、「博物館連絡委員会」に参加する14の博物館が功労賞受賞者として決定した。(受賞理由は本紙「2008年日本第四紀学会功労賞」参照)

7. 研究委員会内規改定案について

資料11にもとづき「日本第四紀学会 研究委員会内規」の改定案について、水野幹事長より説明が行われ、承認された。

8. 経理手続き内規案について(評議員会審議事項)

資料12参照

補助金等申請に必要であることから資料12「経理手続き内規案」について水野幹事長より説明があり、付則の追加や、文章表現の統一、改訂前の文章を含む変更履歴がわかるような条文に修正することを条件に、承認された。

9. 第19回INQUA大会日本招致準備委員会の設置の提案

奥村INQUA連絡委員より、2011年大会で開催地が決定される、2015年第19回INQUA大会を日本に招致するための準備委員会の設置が提案された。招致の目的や、招致スケジュールについて説明があり、奥村会員、斎藤文紀会員、遠藤邦彦会員の3名が世話人になる旨の説明があり、設置とINQUA対策費からの支出が承認された。

10. 知的財産権等に関連した会則改訂・法務委員会設置・除名に関する細則等の提案

知的財産権等検討委員会の答申を受け幹事会で検討した結果である、会則の一部改訂、必要が生じた場合の法務委員会の設置並びにその手順(規定)及び除名に関する細則の提案について、資料13「日本第四紀学会 会則 改訂案(抜粋版)」、資料14「日本第四紀学会 法務委員会規定(案)」、資料15「日本第四紀学会 除名に関する細則(案)」に基づき、水野幹事長により説明が行われた。会則改定案については学生会員についての規約を条項を分けて入れる必要があることや、除籍と除名のちがいを内規に記録する必要がある旨の意見があった。これらの提案に関してはもう一度幹事会で検討し、文章表現を統一し、各条項について法律の専門家にも検討してもらい、他の規定との整合性のチェックを行った上で、再度評議員会に提案することとした。

11. その他

1) 50周年記念事業実行委員会継続について
50周年記念電子出版の事業が2007年度内に完了

しなかったことから、50周年記念事業実行委員会の活動を2008年度まで1年間、延長することが承認された。

2) 評議員会メーリングリストの作成について
評議員会での議題の連絡、意見聴取、日程調整などのために、評議員全員のメーリングリストを作成し、電子メールによって連絡できるようにすることが、水野幹事長により提案され、承認された。ただし、審議事項の決定は、評議員会を開催して行うこととした。

3)10月のシンポジウム開催提案

オーストラリア国立大学地球科学研究所のランベック教授の来日に伴い、10月3日に東大にて日本第四紀学会主催、日本学術会議後援によりシンポジウムを開催する提案が、奥村会員よりあり、承認された。

資料9 日本第四紀学会 学会賞規定（改訂案）

[目的]

第1条 本規定は日本第四紀学会会則第3条3項に基づき、第四紀学の発展に貢献する優れた業績をあげた会員等の表彰に係わる事項を定める。

[章の名称]

第2条 本学会に、日本第四紀学会賞、日本第四紀学会学術賞、日本第四紀学会功労賞、日本第四紀学会論文賞及び日本第四紀学会奨励賞(以下「学会賞」、「学術賞」、「功労賞」、「論文賞」及び「奨励賞」と略称する)を設ける。

[受賞の対象]

第3条 学会賞は、第四紀学の発展に貢献した顕著な業績や活動、及び学会活動に貢献した正会員に授与し、学会における最高の賞とする[1文字追加]。学術賞は、第四紀学に貢献した優れた学術業績をあげた正会員に授与する[1文字追加]。功労賞は、第四紀学の発展や学会活動に貢献した個人や団体、組織に授与する。論文賞及び奨励賞は、会誌「第四紀研究」に掲載された第四紀学の発展や進歩に貢献する優れた論文を発表した会員である著者に授与する。奨励賞は若手研究者の育成と研究奨励に寄与することを目的とする。

[受賞者の選考]

(学会賞と学術賞)

第4条 学会賞及び学術賞候補者を選考するため、学会賞受賞者選考委員会(以下「学会賞選考委員会」と略称する)をおく。

第5条 学会賞選考委員会は、評議員の投票により選出された評議員経験が2期以上の5名の会員からなる学会賞選考委員で構成し、学会賞選考委員の互選により学会賞選考委員長を置く。学会賞選考委員の任期は1年とし、3期以上連続して就任できない。

第6条 本学会会員は、学会賞選考委員会に対して

学会賞及び学術賞受賞候補者を推薦することができる。

第7条 学会賞選考委員会は毎年6月30日までに選考を終了し、受賞候補者を会長に答申する。学会賞選考委員会は必要に応じて参考人から意見を聴取することができる。

(功労賞)

第8条 功労賞の選考は、幹事会にて行い、評議員会に候補者を推薦する。

(論文賞と奨励賞)

第9条 論文賞及び奨励賞受賞候補者を選考するため、論文賞受賞者選考委員会(以下「論文賞選考委員会」と略称する)をおく。

第10条 論文賞選考委員会は、評議員の投票により選出された5名の論文賞選考委員で構成し、論文賞選考委員の互選により論文賞選考委員長をおく。論文賞選考委員の任期は1年とし、連続して論文賞選考委員に就任することはできない。

第11条 本学会会員は、論文賞選考委員会に対して論文賞及び奨励賞受賞候補者を推薦することができる。

第12条 論文賞選考委員会は毎年6月30日までに選考を終了し、受賞候補者を会長に答申する。論文賞選考委員会は必要に応じて参考人から意見を聴取することができる。

[受賞者の決定]

第13条 評議員会は、学会賞選考委員会、幹事会及び論文賞選考委員会から推薦された受賞候補者をもとに、受賞者を決定する。

[選考結果の報告]

第14条 学会賞選考委員長、幹事長及び論文賞選考委員長は、評議員会の結果を踏まえて受賞者の選考経過と結果を総会に報告する。

[授賞式]

第15条 授賞式は総会で行い、学会賞、学術賞、功労賞及び論文賞受賞者へは賞状を、奨励賞受賞者へは賞状及び副賞 賞金 を授与する。

[その他]

第16条 本規定に定めるもののほか、学会賞に係わる必要事項は内規として評議員会が別に定める。

[規定の変更]

第17条 本規定の変更には評議員会の承認を必要とする。

[規定の施行]

第18条 本規定は2008年9月1日から施行する。
[変更]

資料10 日本第四紀学会 学会賞と学術賞選考に関する内規（改訂案）

1.学会賞は、第四紀学の発展に貢献した顕著な業績や活動及び学会活動に貢献した正会員に授与する[1文字追加]

2. 学術賞は、第四紀学の発展に貢献した優れた学術業績をあげた正会員に授与する〔1文字追加〕優れた編書・著書・論文などの一連の業績を対象とする。
3. 名誉会員に対しては、既に第四紀学及び学会活動に顕著な功績がある者として顕彰がされていることから、学会賞及び学術賞の対象者としていない〔1項追加〕
4. 学会賞と学術賞の授与は、原則として毎年とし、それぞれ若干名とする。
5. 学術賞の対象成果が、複数の著者 研究グループ等を含む によりなされたものである場合には、筆頭著者または代表者に学術賞を授与する。
6. 学会賞選考委員は、会長が専門分野を付記して推薦した10名以上の正会員のなかから、評議員の投票により選出される。得票数が同数のときは、専門分野の委員数が少ない者を委員とする。専門分野の委員数も同数の場合は、年長順とする。選挙の際には、分野を考慮した選挙を行うため、各分野からの候補者、過去3年間の学会賞選考委員会の名簿を明示する。なお、学会賞選考委員の任期は1年とし、3期以上連続して就任できない。
7. 学会賞選考委員が受賞候補者となった場合には、賞の選考に関与しないこととする。
8. 学会賞選考委員に欠員が生じた場合は、次点者を補充する。
9. 受賞候補者の推薦書類は、授与年の3月末日までに日本第四紀学会学会賞選考委員会宛てに提出する。
10. 受賞候補者の推薦書類には次の事項を記入する。賞の名称、推薦者名（自薦を含む）、受賞候補者名、受賞件名及び推薦理由。
11. 会長は第四紀通信に学会賞と学術賞の受賞候補者の推薦募集に関する記事を掲載する。
12. 学会賞〔タイプミス修正〕選考委員会は、授与年の3月末日までに届いた自薦と他薦及び評議員から推薦された候補者の中から受賞候補者を選考し、会長に答申する。また、学会賞選考委員長は、評議員会と総会において、選考経過と結果を報告する。
13. 学会賞選考委員長は第四紀通信に評議員会で決定した受賞者と受賞理由を報告する。
14. 学会賞と学術賞の選考において、受賞候補者が、当該年の論文賞の受賞候補者となっても、双方の賞の妨げとしない。
15. 本内規の変更には評議員会の承認を必要とる。
16. 本内規は、2008年9月1日から施行する〔変更〕

（参考）日本第四紀学会 名誉会員候補者選考規定
日本第四紀学会会則に基づき、以下の規定により、
名誉会員候補者を選考する。

・名誉会員候補者選考委員会

1. 評議員会は、原則として5年ごとに、名誉会員候補者選考委員会を設ける。

2. 委員数は若干名とし、会長が委嘱する。

・選考基準

1. 第四紀学について顕著な貢献のあった者
 2. 本学会誌に発表された論文のある者
 3. 本会会員歴20年以上の者
 4. 年令70才以上の者
 5. 本会に関係した活動、たとえば本会の会長、評議員をつとめる等、貢献のあった者
- 以上の条件を満たす者の内から、特に多大の功績があった者を選ぶものとする。

資料11 日本第四紀学会 研究委員会内規(改訂案)
(1992年9月13日、評議員会にて決定)
(2008年8月22日、評議員会にて一部改正)

1. 研究委員会は、会則第17条に基づく特別委員会の一種で、第四紀学の特定の研究課題についての国内・国外の情報を交換し、研究を推進するためのグループである。当分の間、国際第四紀学連合(INQUA)の研究委員会(Commission) (分科会 Sub-commission、作業部会 Working Group を含む)などにおける諸活動に対応する国内委員会としての役割を果たすほか、IPCC、IGBPなどの関連する国際組織への対応を目的に含めることとする。
2. 研究委員会の設置は、少なくとも5人以上の正会員からの申し出に基づいて、幹事会から評議員会に提案され、評議員会の承認を得るものとする。
3. 研究委員会の発足を希望する会員は、委員会名、代表者、連絡先、目的、活動予定期間、活動計画、支出計画、予想される参加者数などを文書で幹事会に申し出るものとする。
4. 研究委員会の目的を推進するために、学会は財政的に可能な範囲内で、研究委員会の会議費活動費を4年を限度として交付する。
5. 研究委員会の任期は当面INQUA後の最初の評議員会から次のINQUA後の評議員会までの4年間とするが、5年度以降も会議費の配分を受けずにさらに4年を限度として任期を延長することができる。
6. 研究委員会は、集会の開催通知や活動記録などを「第四紀研究第四紀通信」に掲載することとし、集会は一般会員にも公開することを原則とする。
7. 研究委員会の責任者代表者は毎年年度末までに活動報告、会計報告および次年度の活動の希望の有無を幹事会を経由して評議員会に文書として提出しなければならない。
8. 研究委員会の代表者は対応するINQUAのCommission等に活動成果などを報告するとともに、その内容をINQUA終了後に幹事会を経

由して評議員会に文書として提出する。

89. 研究委員会の運営は責任者代表者に一任するが、この内規で処理できない点については、幹事会と協議するものとする。

資料12 日本第四紀学会 経理事務内規(案)

(総則)

1. 日本第四紀学会の経理事務は、一般に公正妥当と認められる会計原則にしたがって行うものとし、その業務を株式会社春恒社(以下学会事務局という)に委託する。
2. 本会の会計幹事および会計監査は必要に応じて経理に関する帳簿、証票書類、現金ならびに棚卸資産などを調査し、それらを主管する。
3. 金融機関との直接取引の名義は日本第四紀学会会長名とし、新会長就任後直ちに名義変更を行う。

(会費徴集)

4. 会費徴集業務は、これを学会事務局に委託する。
5. 当年度の会費の請求は年度開始の1ヶ月前(7月)に行う。ただし、会費変更の予定がある場合には、総会終了後直ちに行う。
6. 会費未納者への督促は、原則として7月、10月、1月の年3回行う。

(予算の編成)

7. 収支予算案は、会計幹事によって見積られた予算資料にもとづいて幹事会で審議し、評議員会、総会の承認を経て決定する。
8. 各担当幹事は、原則として、6月末までに次年度の事業計画および事業予算案を幹事会へ提出し予算計上について審議を行う。

(予算管理)

9. 予算の執行は、予算の枠内において各担当幹事の責任のもとにこれを実施する。
10. 予算に組み込まれていない支出および予算執行時の見積りが予算を超過する支出については、幹事会で協議し決定する。
11. 各予算を翌年に繰越して使用するときには、幹事会の承認を経て、翌年度の予算編成時にこれを加えることができる。
12. 会計幹事および庶務幹事は会費徴集状況を把握し、必要と認められたときには、定期督促以外の督促を学会事務局に指示する。
13. 会計幹事は、原則として年2回(12月末および6月末)およびその他必要と認める時期に、収支状況ならびに資金繰り状況に関する試算表を作成し、幹事会に財務報告を行う。

(会計手続き)

14. 収納金に対する領収書は、原則、会長名で発行する。
15. 外部に対する支払は、原則として、毎月25日に締切り、翌月25日に銀行振込みをもって支払

う。銀行振込みが不可能な場合のみ現金による支払いが許される。

16. 総務関係費(印刷費、通信費、消耗品費、慶弔に伴う雑費などを含む)に属する支出については、会計幹事の承認の上、支払い手続きを行うものとする。
17. 学会事務局は当該担当幹事もしくは会計幹事の承認を得て支払を行うものとする。
18. 学会事務局は未払金および未収金を明確に把握できるように会計処理を行なう。

(決算)

19. 決算の手続きは学会事務局が行うものとする。なおその主管は会計幹事とする。
20. 決算の内容は総会・評議員会前の幹事会において決定する。決算の内容については会計監査の監査を受けておかなければならない。

資料13 日本第四紀学会 会則 改訂案(抜粋版)

第2章 会員

第5条 本会は第四紀学に関心を持つ会員で組織する。会員は会則と倫理憲章を遵守する義務を負う。会員は会誌等の配布を受け、第3条に規定した事業に参加する権利を有する。

第6条 会員は正会員、名誉会員および賛助会員の3種とする。

正会員および名誉会員は第2条の目的達成に寄与する個人とし、賛助会員は第2条の目的を賛助する個人および法人等とする。名誉会員は第四紀学について顕著な功績ある正会員の中から評議員会が推薦し、総会の議決によって定める。

2. 会員になろうとするものは、本会会則および倫理憲章に同意の上、入会申込書を会長宛に提出しなければならない。また、本会を退会しようとする会員は、会長宛に退会届を提出することとする。
3. 1年以上、会費を滞納した会員は、評議員会の議を経て、除籍されることがある。
4. 会員が本会の名誉を著しく傷つけた場合、もしくは本会の倫理憲章および会則に著しく抵触する行為があった場合には、総会の議を経て、会長により除名されることがある。なお、除名に関する細則は別途定める。

第7条 会員は総会の議決によって定められた会費を納めなければならない。会費は前納とし、年額正会員9,000円(ただし、学生・院生は5,000円)、賛助会員1口(20,000円)以上とする。名誉会員は会費の納入を要しない。1年以上会費を滞

納した会員は、評議員の議をへて除名されることがある。〔削除〕

第16条 幹事は幹事会を構成する。幹事会は幹事長1名を互選する。幹事会は会務を執行するために、庶務・会計・編集・行事・広報などに関する委員会を置くことができる。各委員会の委員は幹事会が正会員の中から選び、会長が委嘱する。なお、会長は必要に応じて、非会員に外部委員を委嘱できる。

第17条 本会は必要に応じ評議員会の承認を得て法務委員会等の特別委員会をおくことができる。

付則2 本会則は2008年8月23日より施行する。

資料14 日本第四紀学会 法務委員会規定(案)

第1条(設置)

法務委員会は、会則第17条に基づき、必要に応じて設置される。

第2条(目的)

本委員会は、日本第四紀学会および会員が必要とする法律・倫理に関する知見を本会に提供することを主たる目的とする。

第3条(任務)

本委員会は評議員会より諮問された、以下に掲げる任務を執り行う。

- (1) 学会および会員の法的地位の保全に関わる事項
- (2) 日本第四紀学会会員除名に関わる答申
- (3) その他、評議員会より要請があった事項

第4条(組織)

本委員会は委員長、委員および外部委員から構成される。

第5条(委嘱および解任)

委員は正会員の中から、幹事会が推薦し会長が委嘱する

2. 外部委員は幹事会が推薦し、会長が委嘱する。
3. 委員長は、委員および外部委員の中から互選により決定する。
4. 委員会の解散および委員の解任・交代については、評議員会がこれを決定する。

付則 本規定は、2008年8月23日より施行する。

資料15 日本第四紀学会 除名に関する細則(案)

第1条(目的)

本細則は、会則第6条4項の除名に関する手続き等を定めるものである。

第2条(除名手続き)

本会は、会則第6条4項の除名に該当する行為があったと申立を受けた場合に、申し立てられた会員(被申立人)の処遇について、法務委員会に意見を求めることができる。

2. 法務委員会は、前項の申立があったときは、その申立について調査を行い、その結果を評議員会に報告しなければならない。
3. 法務委員会は、被申立人に対し、相当の期間を定めて弁明の機会を与えねばならない。
4. 評議員会は、前項の法務委員会の答申の内容が除名を可とするものであったときは、これを総会に諮る。
5. 会長は、前項の総会決議が除名を可とする場合に、被申立人を除名することができる。
6. その他の必要な手続きについては、別途法務委員会で定める。

第3条(細則の変更)

本細則の変更は、会則第13条に基づき、評議員会の議決によるが、その結果は、総会に報告し承認を得るものとする。

付則 本規定は、2008年8月23日より施行する。

資料16 日本第四紀学会 2007～2008年度役員名簿(2007年8月1日 - 2009年7月31日)

会長: 町田 洋

副会長: 遠藤邦彦

会計監査: 松島義章、山崎晴雄

評議員

共通分野(5名): 海津正倫、遠藤邦彦、公文富士夫、小泉武栄、吉川周作

地質学分野(9名): 池原 研、井内美郎、岡崎浩子、菊地隆男、長橋良隆、増田富士雄、松島義章、水野清秀、三田村宗樹

地理学分野(7名): 吾妻 崇、岩田修二、小野有五、久保純子、鈴木毅彦、宮内崇裕、山崎晴雄

古生物学分野(4名): 犬塚則久、河村善也、高橋啓一、辻 誠一郎

動物学分野(2名): 池田明彦、本川雅治

植物学分野(2名): 松下まり子、百原 新

土壌学分野(2名): 三浦英樹、渡邊眞紀子

人類学分野(2名): 小池裕子、米田 穰

考古学分野(5名): 阿部祥人、小野 昭、佐藤宏之、長友恒人、御堂島 正

地球物理学分野(2名): 石橋克彦、兵頭政幸

地球化学分野(2名): 大場忠道、中村俊夫

工学分野(2名): 大石道夫、陶野郁雄

幹事(*印は会長推薦幹事)

吾妻 崇(会計)、岡崎浩子(編集)、鈴木毅彦(行事)、三浦英樹(渉外)、水野清秀(幹事長)、百原 新(庶務)、苅谷愛彦*(広報)、公文富士夫*(編集)、佐藤宏之*(企画)

資料(3)

日本第四紀学会

会長 町田 洋 殿


2007年度会計監査報告書


2008年7月30日(水)、(株)春恒社 会議室において日本第四紀学会
2007年度収支決算報告書(2007年8月1日～2008年7月31日)の
監査を行い、予算の執行、帳簿、証票の整理等、正常適正に処理されて
いることを確認いたしました。

ここにご報告いたします。

以上

2008年7月30日(水)

会計監査 山崎 晴雄 

会計監査 松島 義章 

資料 (1) 2007年度収支決算報告書
(2007年8月1日から2008年7月31日まで)

(単位: 円)

収入の部	科 目	子 算 額	決 算 額	増 減	摘 要
会費収入		13,550,000	14,422,560	872,560	
正会員会費収入		13,250,000	14,082,560	832,560	通常会員(過年度)会費 11,321,000円(2,124,000円) 学生会員会費351,000円; 海外会員286,560円
賛助会員会費収入		300,000	340,000	40,000	12社登録: 17口入金
誌代		1,900,000	1,807,876	-92,124	Back No., 定期雑誌仕入
別刷代・超過頁代収入		750,000	1,527,249	777,249	
雑収入		200,000	206,821	6,821	JST, 大会余剰金, 著作権料収入等
利子収入		8,000	34,654	26,654	普通預金, 定期預金 各利息
広告料収入		315,000	315,000	0	2007年会員名簿広告料
役員選挙積立金取崩収入		0	0	0	
INQUA対策積立金取崩収入		0	0	0	
名簿作成積立金取崩収入		1,000,000	1,000,000	0	
科研費補助金・助成金		0	0	0	
収入合計		17,723,000	19,314,160	1,591,160	
前期繰越金		3,425,875	3,425,875	0	
合計		21,148,875	22,740,035	1,591,160	

(単位: 円)

支出の部	科 目	子 算 額	決 算 額	増 減	摘 要
会誌発行費		6,540,000	6,736,528	-196,528	
会誌印刷費		3,600,000	3,463,425	136,575	第四紀研究 46巻4号~47巻3号 計6号
会誌編集費		1,000,000	1,337,080	-337,080	
会誌編集人件費		1,440,000	1,440,000	0	編集書記人件費
会誌別刷印刷費		500,000	496,023	3,977	第四紀研究 46巻4号~47巻3号 計6号
会誌・会報発送費		900,000	815,390	84,610	第四紀研究 46巻4号~47巻3号 計6号
会報発行費		860,000	852,723	7,277	第四紀通信 14巻4号~15巻3号 計6通信
会報印刷費		650,000	672,945	-22,945	
会報編集費		10,000	5,528	4,472	
会報編集人件費		200,000	174,250	25,750	会報編集人件費
大会運営準備金		400,000	400,000	0	2008年用(東京大学)
巡検準備金		100,000	100,000	0	2008年用(東京大学)
講演会・シンポジウム費		150,000	165,000	-15,000	シンポジウム経費(東京大学)
予稿集印刷費		400,000	507,412	-107,412	2007年神戸大学大会要旨集(300部)・別冊(150部)
学会賞費		150,000	123,056	26,944	副賞(50,000円×2名), 賞状筆耕代
講習会費		100,000	30,284	69,716	講習会時旅費
通信費		250,000	341,440	-91,440	会費請求書送付郵税等
会議費		50,000	64,802	-14,802	評議員会経費, 会計監査経費
旅費・交通費		600,000	238,920	361,080	幹事会・委員会旅費
印刷費		200,000	334,735	-134,735	総会資料, コピー代等
業務委託費		2,871,120	2,892,933	-21,813	資料(6) 参照
特別刊行物編集費		0	0	0	
50周年事業対策費		2,000,000	2,000,000	0	50周年記念事業実行委員会へ支出
INQUA対策費		0	123,300	-123,300	INQUA巡検
役員選挙費		0	0	0	
名簿作成費		1,500,000	1,433,932	66,068	2007年会員名簿
名簿発送費		0	0	0	
INQUA対策積立金繰入支出		100,000	100,000	0	
役員選挙積立金繰入支出		350,000	350,000	0	
名簿作成積立金繰入支出		0	0	0	
予備費積立金繰入支出		500,000	500,000	0	
研究委員会助成金支出		200,000	109,219	90,781	3委員会より申請(2委員会請求なし)
加盟学協会分担金支出		35,000	20,000	15,000	自然史学会連合分担金
雑費		100,000	28,080	71,920	慶事費, 各種手数料等
助成金支出		0	0	0	
予備費		200,000	110,867	89,133	通信単独発送(通信14-4) 含
支出合計		18,556,120	18,378,621	177,499	
次期繰越金		2,592,755	4,361,414	-1,768,659	
合計		21,148,875	22,740,035	-1,591,160	

資料 (2) 貸借対照表および財産目録

貸借対照表
(2008年7月31日現在)

(単位:円)

借 方		貸 方	
科 目	金 額	科 目	金 額
流 動 資 産		流 動 負 債	
編集書記小口現金	1,014,867	前受会費	433,152
郵便振替	1,011,380	未払費用	100,000
普通預金	2,083,269	小 計	533,152
定期預金	750,000	正 味 財 産	
未収入金	30,000	役員選挙積立金	350,000
前払費用	5,050	INQUA対策積立金	100,000
固 定 資 産		予備費積立金	8,500,000
定期預金	8,950,000	次期繰越金	4,361,414
		(前期繰越金)	3,425,875)
		(当期収支差額)	935,539)
		小 計	13,311,414
合 計	13,844,566	合 計	13,844,566

財 産 目 録
(2008年7月31日現在)

資 産 の 部 (単位:円)

科 目	摘 要	金 額
小 口 現 金	編集書記手許金	1,014,867
郵 便 振 替	会費徴収用払込口座	1,011,380
普 通 預 金	みずほ銀行早稲田支店	1,181,346
普 通 預 金	中央三井信託銀行本店営業部	901,923
定 期 預 金	中央三井信託銀行本店営業部	750,000
定 期 預 金	中央三井信託銀行本店営業部 (予備費積立金)	8,500,000
定 期 預 金	みずほ銀行早稲田支店 (役員選挙積立金)	350,000
定 期 預 金	みずほ銀行早稲田支店 (INQUA対策積立金)	100,000
未 収 入 金	2007年会員名簿広告料	30,000
前 払 費 用	2007年度会計監査会・旅費・会議費	5,050
合 計		13,844,566

負 債 の 部 (単位:円)

科 目	摘 要	金 額
前 受 会 費	2008年度分以降年会費	433,152
未 払 費 用	2008年巡検準備金	100,000
合 計		533,152

正 味 財 産 の 部 (単位:円)

科 目	摘 要	金 額
役員選挙積立金	2008年度役員選挙積立金	350,000
INQUA対策積立金	2008年度INQUA対策積立金	100,000
予備費積立金	予備費積立金	8,500,000
次期繰越金		4,361,414
	前期繰越金	3,425,875
	当期収支差額	935,539
合 計		13,311,414

資料(4) 2008年度予算案
(2008年8月1日から2009年7月31日まで)

収入の部				(単位:円)
科 目	2008年予算案	2007年予算額	2007年決算額	摘 要
会費収入	13,300,000	13,550,000	14,422,560	
正会員会費収入	13,000,000	13,250,000	14,082,560	9,000円×1,450名×97%+(学生5,000円×60名×90%)+(海外会員100,000円)
賛助会員会費収入	300,000	300,000	340,000	20,000円×12社(15口)
団体会員会費収入	0	0	0	2006年度から一般購読扱
誌代	1,900,000	1,900,000	1,807,876	Back No.,定期雑誌仕入,予稿集売上等
別刷・超過頁代収入	800,000	750,000	1,527,249	
雑収入	200,000	200,000	206,821	JST許諾利用料,著作権利用料
利子収入	10,000	8,000	34,654	
広告料収入	0	315,000	315,000	
役員選挙積立金取崩収入	350,000	0	0	
INQUA対策積立金取崩収入	0	0	0	
名簿作成積立金取崩収入	0	1,000,000	1,000,000	
科研費補助金・助成金収入	0	0	0	
収入合計	16,560,000	17,723,000	19,314,160	
前期繰越金	4,361,414	3,425,875	3,425,875	
合計	20,921,414	21,148,875	22,740,035	

支出の部				(単位:円)
科 目	2008年予算案	2007年予算額	2007年決算額	摘 要
会誌発行費	6,540,000	6,540,000	6,736,528	第四紀研究 47巻4号～48巻3号 計6号
会誌印刷費	3,600,000	3,600,000	3,463,425	
会誌編集費	1,000,000	1,000,000	1,337,080	
会誌編集人件費	1,440,000	1,440,000	1,440,000	編集書記手当
会誌別刷印刷費	500,000	500,000	496,023	
会誌・会報発送費	900,000	900,000	815,390	第四紀研究 47巻4号～48巻3号 計6号
会報発行費	860,000	860,000	852,723	第四紀通信 15巻4号～16巻3号 計6号
会報印刷費	650,000	650,000	672,945	第四紀通信印刷費
会報編集費	10,000	10,000	5,528	第四紀通信編集費
会報編集人件費	200,000	200,000	174,250	第四紀通信編集アルバイト代
大会運営準備金	400,000	400,000	400,000	2009年大会用
巡検準備金	100,000	100,000	100,000	2009年大会用
講演会・シボジウム費	200,000	150,000	165,000	
予稿集印刷費	400,000	400,000	507,412	2008年大会講演要旨集(300部)
学会賞費	350,000	150,000	123,056	副賞(50,000円×3名),賞状筆耕代(論文・奨励・学会・学術・功労)
講習会費	200,000	100,000	30,284	
通信費	300,000	250,000	341,440	会費請求書発送郵税,事務通信費等
会議費	100,000	50,000	64,802	評議員会会議費等
旅費・交通費	450,000	600,000	238,920	幹事会・委員会等交通費
印刷費	300,000	200,000	334,735	学会専用封筒,総会資料印刷,コピー代金
業務委託費	2,980,320	2,871,120	2,892,933	
特別刊行物編集費	0	0	0	
50周年事業対策費	0	2,000,000	2,000,000	
INQUA対策費	100,000	0	123,300	
役員選挙費	700,000	0	0	
名簿作成費	0	1,500,000	1,433,932	
名簿発送費	0	0	0	
INQUA対策積立金繰入支出	100,000	100,000	100,000	
役員選挙費積立金繰入支出	0	350,000	350,000	
名簿作成積立金繰入支出	500,000	0	0	
予備費積立金繰入支出	500,000	500,000	500,000	
研究委員会助成金支出	250,000	200,000	109,219	50,000円×5委員会で算出
加盟学協会分担金支出	20,000	35,000	20,000	自然史学会連合分担金
雑費	100,000	100,000	28,080	振込手数料等
助成金支出	0	0	0	
予備費	200,000	200,000	110,867	
支出合計	16,550,320	18,556,120	18,378,621	
次期繰越金	4,371,094	2,592,755	4,361,414	
合計	20,921,414	21,148,875	22,740,035	

資料（５） 2007年度業務委託費
(2007年8月1日～2008年7月31日)

I. 会員業務費用	<u>1,829,575</u>
1. 会員管理費	1,205,400 (1,722件× 700円)
2. 学会誌発送用ラベル作成・貼付・納品	257,175 (計 10,287件× 25円)
学会誌発送用ラベル出力手数料	7,000 (計 7回× 1,000円)
3. 学会誌保管費用	360,000 (100箱× 3,600円/年)
II. 受付業務費用	<u>360,000</u> (@30,000円/月)
III. 会計業務費用	<u>430,000</u> ※年間
IV. 庶務業務費用	<u>58,000</u> ※事務局幹事会・評議員会出席費用
V. その他	<u>77,600</u> ※別刷請求手数料他
	※メーリングリスト費用
消費税負担額 5%	<u>137,759</u>
合 計	<u>2,892,933</u>

資料（６） 2008年度業務委託費見積
(2008年8月1日～2009年7月31日)

I. 会員業務費用	<u>1,870,400</u>
1. 会員管理費	1,190,000 (1,700件× 700円)
2. 特別請求書発行手数料 (海外会員)	26,400 (22件× 1,200円)
(賛助会員)	12,000 (12件× 1,000円)
3. 学会誌発送用ラベル作成・貼付・納品	240,000 (計 9,600件× 25円)
学会誌発送用ラベル出力手数料	6,000 (計 6回× 1,000円)
4. 学会誌保管費用	396,000 (110箱× 3,600円/年)
II. 受付業務費用	<u>360,000</u> (@30,000円/月)
III. 会計業務費用	<u>430,000</u> ※年間
IV. 庶務業務費用	<u>58,000</u> ※事務局幹事会・評議員会出席費用
V. その他	<u>120,000</u> ※別刷請求手数料他
	※メーリングリスト費用
消費税負担額 5%	<u>141,920</u>
合 計	<u>2,980,320</u>

2008年度総会議事録

日時：8月23日（金）10:30 - 11:30
 場所：東京大学理学部1号館小柴ホール
 議長：犬塚則久
 出席者：72名、委任状98通
 記録：百原 新
 鈴木毅彦行事幹事の司会で、多田隆治大会実行委員長、町田会長からの挨拶の後、犬塚則久会員を議長に選出し、定足数確認後、配付資料に基づき下記報告・審議を行った。

報告事項

1. 2007年度事業報告（水野幹事長）
 2007年度および2008年度8月に逝去された会員に対し黙祷を捧げたのち、各事業の報告（本誌「第1回評議員会議事録」に掲載）があった。
2. 2007年度決算報告・会計監査報告（吾妻会計幹事）
 決算報告（本誌「第1回評議員会議事録」に掲載）、
 ついで松島会計監査より会計監査報告（本誌「第1回評議員会議事録」に掲載）があった。
3. 研究委員会報告（水野幹事長代理報告）
 地球温暖化問題を検討する研究委員会、東アジアにおける酸素同位体ステージ3の環境変動と考古学研究委員会、気候変動研究委員会、テフラ・火山研究委員会、古地震・ネオテクトニクス研究委員会からの報告が照会された（各研究委員会の活動報告内容については、本誌「研究委員会活動報告」に掲載）。
4. 知的財産権等に関連した会則改訂・講演要旨集の論文集化等に関する検討結果報告（水野幹事長）
 これまでの経緯と幹事会での検討結果の報告（本誌「第1回評議員会議事録」参照）が行われた。
5. 50周年記念事業実行委員会報告（水野幹事長代理報告）
 国際シンポジウムの実施状況、CD出版物、募金状況（本誌「募金者名簿」に掲載）について報告された。
6. 博物館連絡委員会報告（水野幹事長代理報告）
 学会50周年記念展示の報告と、博物館連絡委員会の終了について報告された（本誌「第1回評議員会議事録」参照）。
7. 日本学術会議地球惑星科学委員会 INQUA 分科会・INQUA 国内委員会報告（奥村学術会議連携委員報告）
 日本学術会議とINQUA（国際第四紀学連合）関連委員会等の活動（本誌「日本学術会議報告」参照）について報告された。
8. INQUA執行委員会および関連事業に関する報告（奥村委員報告）
 INQUA執行委員会に関連する事業の概要報告と

会計報告が行われた（本誌「INQUA執行委員会および関連事業報告」参照）。

9. 学会賞規定及び学会賞と学術賞選考に関する内規改訂の報告（水野幹事長）
 学会賞・学術賞に関連する規定、内規の改訂について評議員会で承認された旨（本誌「第1回評議員会議事録」参照）報告された。
10. 学会賞・学術賞受賞者の決定についての報告（水野幹事長）
 配布資料にもとづき、学会賞受賞者2名、学術賞受賞者2名が評議員会で決定されたことが報告された（受賞者、受賞理由は、本誌「2008年日本第四紀学会学会賞・学術賞」に掲載）。
11. 論文賞・奨励賞受賞者の決定についての報告（水野幹事長）
 配布資料にもとづき、論文賞受賞1件、奨励賞受賞者2名が評議員会で決定されたことが報告された（受賞者、受賞理由は本誌「2008年日本第四紀学会論文賞・奨励賞」に掲載）。
12. 功労賞受賞者の決定についての報告（水野幹事長）
 配布資料にもとづき、「博物館連絡委員会」に参加する14の博物館が功労賞受賞者として評議員会で決定されたことが報告された。（受賞対象機関、受賞理由は本誌「2008年日本第四紀学会功労賞」参照）
13. 研究委員会内規改定についての報告（水野幹事長）
 資料にもとづき「日本第四紀学会 研究委員会内規」の改定案が評議員会で承認されたことが報告された（本誌「第1回評議員会議事録」参照）。
14. 経理手続き内規についての報告（水野幹事長）
 資料にもとづき「経理手続き内規案」が評議員会で承認されたことが報告された（本誌「第1回評議員会議事録」参照）。
15. 第19回INQUA大会日本招致準備委員会の設置の提案について（水野幹事長）
 2015年に開催される第19回INQUA大会を日本に招致するための準備委員会の設置の提案が評議員会で承認された旨、報告された（本誌「第1回評議員会議事録」参照）。
16. 知的財産権等に関連した会則改訂・法務委員会設置・除名に関する細則等についての報告（水野幹事長）
 資料にもとづき、知的財産権等検討委員会の答申を受け、幹事会および評議員会で検討した結果、今回提案した会則改訂案等の不備をさらに修正する必要があること、次回以降の評議員会及び総会にてあらためて提案することが報告された（本誌「第1回評議員会議事録」参照）。

17. その他の報告（水野幹事長）
50周年記念事業実行委員会の1年間延長、評議員会メーリングリストの作成、10月のシンポジウム開催予定について報告があった（本誌「第1回評議員会議事録」参照）。

審議事項

- 2008年度事業計画（水野幹事長）
2008年8月1日 - 2009年7月31日における各事業計画（本誌「第1回評議員会議事録」に掲載）が説明され、いずれも原案どおり承認された。
- 2008年度予算案（吾妻会計幹事）
2008年度予算案（本誌「第1回評議員会議事録」に掲載）が説明され、原案どおり承認された。

2008年度第1回幹事会議事録

日時：8月22日（金）12:30 - 13:30
場所：東京大学理学部1号館336教室
出席者：町田 洋（会長）遠藤邦彦（副会長）、吾妻崇、岡崎浩子、公文富士夫、佐藤宏之、鈴木毅彦、三浦英樹、水野清秀、苅谷愛彦、中川庸幸（事務局）、百原 新（記録）。このほか説明者として横山祐典会員が出席。

（議事）

1. 庶務

- 1) 評議員会・総会の配付資料と進行、学会賞授賞式の進行について確認した。
 - 2) 7月会員消息について、除籍者115名のリストを含む配付資料をもとに確認した。
2. 10月の第四紀学会主催のシンポジウムについて。
オーストラリア国立大学地球科学研究所のランベック教授の来日に伴い、10月3日に東大にて日本第四紀学会主催、日本学術会議後援によりシンポジウムを開催する提案について、資料にもとづき、横山祐典会員により説明が行われた。「気候変動研究委員会」主催のイベントとして扱うことが確認された。

第四紀研究執筆要項の改訂のお知らせ

編集委員会で検討してきた執筆要項の改訂が7月21日の幹事会で承認され、8月23日の総会でも確認されました。実施は2009年1月1日からですが、以下に掲載します（同じものは第四紀学会ホームページからも入手できます）ので、これから投稿を準備される方はそちらを参考にして、執筆して下さい。

第四紀学会編集委員会

執筆要項

1. 原稿

使用する言語は日本語、または英語とする。印刷用紙はA4判を使用し、ワードプロセッサで作成する。日本語の場合は1ページ25字×22行で印字し、行間は1行分程度あけ、用紙の上下・左右に余白を十分とる。英語の場合は12ポイント、22行で印字する。1ページ目に表題、著者名、ランニングタイトルを、2ページ目から摘要、キーワードを記入する。なお、原稿にはページ番号を入れること。

2. 表題・著者名

著者名の右肩に*¹, *²,の記号をつけ、原稿の1ページ目の下部に脚注として所属とその所在地、論文責任者の連絡先(住所・Eメールアドレスなど)を明記する。なお、英文タイトルに用いる大文字は、タイトルの先頭と固有名詞の先頭のみとし、他は小文字を用いる。

3. ランニングタイトル（欄外表題）

1ページ目の中段に表題と著者名のそれぞれについてランニングタイトルをいれる。ランニングタイトルは各ページの欄外に掲載する短い表題と著者名のことである。本文が日本語の場合には30字以内、英語の場合には8語以内とする。

4. 摘要・キーワード（改ページ）

4-1. 摘要は原稿のページを改めて書き始める。

4-2. 原著論文・短報・総説には、本文と同じ言語で内容の要点をまとめた摘要(abstract)をつける。

4-3. 摘要の長さは、本文が日本語原稿の場合は400字以内、本文が英文原稿の場合は300語以内とする。

4-3. 摘要の最後には、時代・地域・対象・方法などを表す5語程度のキーワード(keywords)を本文と同じ言語でつける。

（例）キーワード：ナイフ形石器、完新世、大阪層群、関東平野、花粉分析

Keywords: backed-blade, Holocene, Osaka Group, Kanto Plain, pollen analysis

- 8-2. 図版は1ページごとに図版 , 図版 , Plate I, Plate II のように番号をつける .
- 8-3. 横と縦の印刷サイズは 14.5 × 20cm となるから , できるだけこの比率になるように写真原稿を白い台紙に貼る . 図版の内容の大きさを示すスケールを入れる .
- 8-4. 受理後に提出する最終原稿の図版は電子ファイルでも提出できるが , 印刷したものを必ず添付する .
9. カラー図・カラー図版
編集委員会でカラー図・カラー図版を認めることがある . 著者はその旨を投稿時に申し出ること . 費用は著者負担とする .
10. キャプション(図表などの表題や説明文)
別紙にまとめて書く . 日本語論文の場合でも日本語のほか英語キャプションをつけることができる .
11. 引用
- 11-1. 文中の引用は次の例にならう .
これらの研究(湊・陶山, 1950 ; 多田, 1975 ; 松井ほか, 1977)によると
..... という結論が得られている(Cox and Dalrymple, 1967) .
小林(1951a, b), 湊(1974)の研究によれば
..... と Miller(1970 : p.25-26)は述べている .
- 11-2. 卒業論文・修士論文は原則として引用しない .
- 11-3. 投稿中であっても受理されていない論文は引用しない . なお , 本誌の特集号などのように , 同一のテーマに関連した論文を同一号に集める必要があると編集委員会が認める場合にかぎり , 未受理の段階での引用を認めることがある . 受理後未刊行のものについては(印刷中), (in press)として引用することができるが , 投稿時に当該論文のコピーと受理通知書(コピー可)を添付する . ただし , オンラインで先行公開されている場合には , その旨と当該論文の DOI (Digital Object Identifier) を編集委員会へ通知するだけでよい .
- 11-4. ホームページの引用は原則として公的機関等が運用するものからのみとし , URL と , 表題 , 参照した日付を引用文献に明記する .
12. 引用文献
- 12-1. 引用文献は , 日本語・英語を問わず著者のアルファベット順にならべる . 同一著者の場合は年代の古い順にならべ , 年代が等しい場合は本文の引用順に a, b をつける . 印刷中(in press)として引用した論文をもっとも新しいものとして扱う . 同一著者が筆頭著者となった共著論文が引用されている場合には , 単著論文を前にする . 2名の共著論文では , 筆頭著者と第二著者のアルファベット順とし , 同一組み合わせの場合には年代の古い順にならべる . 3名以上の場合には , 第二著者のアルファベット順位にかかわらず年代の古い順とする . 3名以上の著者が同一の年に出した複数の論文が引用されている場合には , 引用順に a, b, c をつける . 例えば , 本文中では引用の順に BB ほか(2004a) , BB ほか(2004b) と区別し , 引用文献欄では , 以下のように並べる(B, A, Cはアルファベットを表す) .
BB・CC・AA (2004a) . . .
BB・AA・CC (2004b) . . .
- 12-2. 雑誌名は原則として完記する .
- 12-3. 雑誌の巻数は数字のみとする . 巻・号のある雑誌で通巻ページの場合 , 号数は省略する . 毎号ページが変わる場合には号数を()に入れ , 例えば , 10(2)のようにする . 号のみ場合は no. を付して記載する .
- 12-4. ページの表記については , 単行本の総ページを示すときは 25 p , 単行本および論文集の該当ページを示すときは , コロン(:)に続き 10-25 のようにする . 単行本からの引用など , その他の表記は引用文献の例にならう .
- 12-5. 学術雑誌などの電子出版物を引用する際には , 特定の引用表記方法が指定されている場合を除いて , 通常の印刷出版物と同様の表記とする . 印刷出版物と電子出版物が同時に出版されている場合には , 原則として印刷出版物を引用する .
- 12-6. 和文論文における引用文献の例
Cox, A. and Dalrymple, G.B. (1967) Geomagnetic polarity epochs, Nunivak Island, Alaska. Earth and Planetary Science Letters, 3, 173-177.

- Embleton, C. and King, C.A.M. (1957) Periglacial geomorphology. 230p Halsted Press.
- 藤原 治 (2004) 津波堆積物の堆積学的・古生物学的特徴. 藤原 治・池原 研・七山 太
編「地震イベント堆積物 深海から陸上までのコネクション」, 地質学論集 no. 58, 35-44.
- 貝塚爽平・鈴木毅彦 (1992) 関東ロームと富士山. 土と基礎, 40 (3), 9-14.
- 川辺禎久・坂口圭一・斎藤 眞・駒澤正夫・山崎俊嗣 (2004) 20 万分の1 地質図幅「開聞岳及び黒島の一部」. 産業技術総合研究所地質調査総合センター.
- 小林国夫(1951a) フォッサ・マグナ西部付近に於ける第四紀編年. 信州大学文理学部紀要, 1, 9-25.
- 小林国夫 (1951b) 常念岳東方の断層地層の関する一考察. 地理学評論, 24, 377-381. 国土地理院 (1997) 数値地図 50m メッシュ (標高) 日本 - II. CD-ROM 版.
- 小松原琢・中澤 努・兼子尚知 (2004) 木更津地域の地質. 地域地質研究報告 (5 万分の1 地質図幅), 64p, 産業技術総合研究所地質調査総合センター.
- Lisiecki, L. E. and Raymo, M. E. (2005) A Pliocene-Pleistocene stack of 57 globally distributed benthic ^{18}O records. *Paleoceanography*, 20, PA1003, doi:10.1029/2004PA001071.
- メイスン, S.(矢島祐利訳(1955) 科学の歴史. 695p, 岩波書店.
- 松井 健・杉村 新・渡辺直経 (1977) 日本第四紀学会史. 日本第四紀学会編「日本の第四紀研究」: 1-9, 東京大学出版会.
- Miller, H. (1970) Method and results of river terracing. Dury, G.H. (ed.) *Rivers and river terraces*: 19-35, Macmillan.
- 湊 正雄 (1974) 日本の第四系. 167p, 築地書館.
- 湊 正雄・陶山国雄 (1950) 沖積世の問題. 地球科学, 3, 1-16.
- 能城修一・鈴木三男 (1989) 野川中洲北遺跡の木材遺体群集. 小金井市遺跡調査会編「野川中洲北遺跡 - 自然科学分析編」: 69-93, 小金井市遺跡調査会.
- National Geophysical Data Center (2006) 2-minute gridded global relief data (ETOPO2v2).
<http://www.ngdc.noaa.gov/mgg/fliers/01mgg04.html>, 2008 年 3 月 17 日引用.
- Olschesky, K.S. and Laws, R.A. (2006) Data report: Pliocene-late Pleistocene diatom biostratigraphic data from ODP Leg 185, Hole 1149A. Ludden, J.N., Plank, T. and Escutia, C.(eds.) *Proceedings of Ocean Drilling Program, Scientific Results*, 185(2), 1-31.
- 奥野 充・松島義章・長岡信治・森脇 広・新井房夫・中村俊夫 (1998) 南九州, 鹿児島湾の燃島貝層中のベッコウガキの加速器 ^{14}C 年代. 福岡大学理学集報, 28(2), 123-128.
- 奥野 充・松島義章・長岡信治・福島大輔・成尾英仁・森脇 広・小林哲夫 (2000) 始良カールデラ東壁にみられる最近 10 万年間のテフラ. 火山, 45, 41-46.
- 相模原市教育委員会 (2003) 田名向原遺跡 I. 87p, 相模原市教育委員会.
- Stow, D.A.V. and Piper, D.J.W. (eds.) (1984) *Fine-grained sediments: deep-water processes and facies*. 659p, Geological Society, Special Publication, no.15, Blackwell.
- 多田文男 (1975) 日本における砂丘研究史. 日本第四紀学会講演要旨集, 4, 25-26.
- < 博士論文等の未公表論文の引用例 >
- Kubo, S. (1995MS) Buried terraces in the lower Sagami Plain, central Japan: Indicators of sea levels and landforms during the Marine Isotope Stage 4 to 2. Doctoral dissertation to Tokyo Metropolitan University, 147p.
- 12-7 英語論文における引用文献の書き方の例
本文が英語の場合, 引用文献リストには, 日本語のみの論文には“(J)”を, 英文のabstractがある日本語の論文には“(J+E)”を各論文の最後につけ, リストの最後に行あけて“(J) in Japanese, (J+E) in Japanese with English abstract.”と記す.
- Kamei, T. (1962) Some problems on the succession of the Quaternary mammalian faunas in Japan. *Earth Science (Chikyū-kagaku)*, 60・61, 23-34. (J+E)
- Kamei, T. (1979) An aspect on the Cenozoic mammals in the Japanese Islands. *Honyurui Kagaku (Mammalian Science)*, 38, 1-11. (J)

(J) in Japanese, (J+E) in Japanese with English abstract.

13. 要旨

13-1. 原著論文・総説・短報には、本文と異なる言語(英語論文の場合は日本語)で、内容を要約した要旨(summary)をつける。要旨の長さは刷り上がり1ページ以内とする。なお、短報の場合には省略することができる。

13-2. 表題、著者名、要旨、キーワードの順に書き、脚注に所属とその所在地を書く。言語は英語または日本語に統一する。なお、英文タイトルに用いる大文字は、タイトルの先頭と固有名詞の先頭のみとし、それ以外は小文字とする。著者の姓名は完記する。

13-3. 英語要旨には、すみやかに校閲するために日本語対訳を別紙で添える。ただし、この対訳は印刷されない。

付則本要項は2009年1月1日から実施する。

第四紀・更新世定義問題の解決へ向けて：第33回国際地質学会参加報告

奥村晃史（広島大学大学院文学研究科）

2008年8月6日から14日まで、ノルウェーの首都オスロで第33回国際地質学会(IGC)が開催された。国際地質学会は4年に一回開催される地質学のオリンピックで、今回も113の国と地域から6250人の参加があった。地球温暖化に関わる地球環境問題変動に注目が集まる中、今回のIGCにおいても、第四紀の環境変動や現代の人間を取り巻く環境や自然災害に関わるセッションが多数開催されて活発な研究交流が行われた。さらに、2004年の第32回IGCで公表された地質年代表(GTS2004)で第四紀が消去された事件に端を発して過去4年間紛糾した第四紀・更新世定義問題の解決に向けたセッションと討論会も開催され、第四紀学にとっては従来に増して重要なIGCとなった。

地質年代区分において過去20年以上第三紀と第四紀は正式に位置づけられていなかった。国際地質科学連合(IUGS)国際層序委員会(ICS)は幅広い意見の聴取や正式な手続きを経ることなく、それまで慣用的に用いられてきた第四紀をGTS2004で消去し、従来の新第三紀(Neogene)を現在まで延長した。国際第四紀学連合(INQUA)とICS第四紀層序小委員会(ICS-SQS)はこれに素早く反応して、第四紀を新第三紀に続く正式の紀とすること、同時に第四紀の始まりと鮮新世・更新世の境界の見直しを開始した。日本を初め、世界各国の第四紀コミュニティーもこの問題を重要視して議論を重ねた結果、2007年INQUA大会では、第四紀を新第三紀に続く紀と定義すること、第四紀の始まりを2.59 Maの従来の鮮新世ジェラ期(Gelasian)の始まりとすること、第四紀の始まりと更新世の始まりを一致させるために、ジェラ期を更新世の最初の期とすることが決議された。

この提案はICSの委員による投票で多数の支持を受け、INQUA-ICS提案としてオスロIGCで正式に提起された。またIUGS執行部も第四紀を紀として存続させること、および、第四紀の始まり及び鮮新-更新世境界については引き続き検討することをICSに指示した。従ってオスロでは、第四紀に関わる最終的な議決は行われず、この問題の解決への道筋を明らかにして議論を開始することが主眼となった。

8月9日と13日の研究発表、9日夜の討論会では、ジェラ期開始前後の環境変動をバイカル湖、パナマ地峡周辺、イタリア南部の層序から検討し、第四紀の始まりをどこにするかについて議論が交わされた。多くの地質事象は2.5 Maから3 Maに起こり環境変動も漸移的なケースが多いが、その前後の差は歴然としている。そこに対比が確実な一層準を設けて第四紀の始まりとするのであれば、Gauss-Matuyama古地磁気境界に一致するジェラ期基底が最も適切であろうとする意見がINQUAとSQSの立場から繰り返し表明された。2004年以来周到に準備を進めてきたINQUAとSQSが議論をリードする一方で、新生代をNeogeneとPaleogeneに二分しNeogeneの終わりを現在とすることを主張するグループは、第四紀の存在を認めたくうで妥協的な提案を行うにとどまっていた。

INQUA-ICS提案は、上位の時代区分である第四紀/新第三紀境界と更新世/鮮新世境界を一致させ、更新世の始まりをジェラ期の始まりに変更することも含んでいる。これは、鮮新世の終わりを現在の1.81 Maから2.59 Maに変更することを意味する。この点に関しては、地質図の全面改定という現実問題や従来のカラブリア階基底の定義を守る立場からの保守的な反

対意見が多く述べられたが、環境変動を指標とした時代区分としての科学的な面からの従来の区分を支持する意見はなかった。

日本第四紀学会と日本学術会議第四紀研連・INQUA 分科会は従来から INQUA の方針を支持し、討論会においても日本の鮮新更新統の存在と堆積開始時期からみて 2.59 Ma を第四紀と更新世の始まりとする提案は妥当であるとの見解を伝えた。オスロで ICS 新委員長に就任した S. Finney は第四紀問題の解決に鋭意取り組んでおり、討論会では開かれた議論、公式文書、正式な手続きにより決着を着けることを明言した。その指導のもと、INQUA-SQS は IGC 直後から精力的に活動を続けており、過去数十年を要した議論に終止符が打たれるのは間近とみられる。この議論の骨子と第四紀の層序区分に関する最新の論文が IUGS の機関誌 Episodes 31 巻 2 号の特集として出版され、まもなく PDF 全文がダウンロード可能となる (<http://www.episodes.org/>) ので参照されたい。今回の IGC へ代表として派遣していただいた日本学術会議にこの場を借りて謝意を表します(日本学術会議 INQUA 分科会・国際第四紀学連合副会長)。

[注] Gelasian は模式地の存在するイタリア・シチリア島南岸の町 Gela (ジェラ) にちなんで命名されており、ここではジェラ期/階の日本語訳を当てる。Neogene が鮮新世と中

新世を含む従来の定義どおりに用いられる場合、日本での慣用に従ってここでは新第三紀と表記した。

図 GTS2008 (<http://www.stratigraphy.org/chou.pdf>)より新生代後期を抜粋
更新世と鮮新世の境界の両論が破線で並記されているが、第四紀基底は実線で新第三紀と区分されている。注記には『第四紀の位置づけと更新世の定義について現在議論が行われている。更新世の始まりはカラブリア期の始まり (1.81 Ma) であるが、ジェラ期の始まり (2.59 Ma) まで引き下げられる可能性がある。従来の第三紀は Paleogene と Neogene を含むが、公式に定義されていない。』と記されています。

累代	代	紀	世	期	年代 Ma
	界	系	統	階	
中生代	新生代	第四紀	完新世		0.0117
			更新世	Upper	0.126
				"Ionian"	0.781
				Carabrian	1.806
				Gelasian	2.588
			新第三紀	鮮新世	Piacenzian
				Zanclean	5.332
			中新世	Messinian	7.246

日本第四紀学会講習会「縄文土器の製作技術と焼成に関する実験考古学」のお知らせ

下記の内容で、東京都埋蔵文化財センターとの共催による第四紀学会講習会を開催いたします。

日時: 2008年10月25日(土)

2008年11月8日(土)

会場: 東京都埋蔵文化財センター 〒206-0033 東京都多摩市落合1-14-2

概要: 縄文土器の製作技術の研究は、縄文時代の文化や技術伝統を考える上で欠かすことのできない研究分野である。今回は、縄文土器の復元製作と焼成実験を通して、土器製作技術の内実を理解することを目的とする。

なお、復元製作した土器は、焼成するまでの間、一定の乾燥期間が必要なため、今回は2回に分けて実施する。両日もとも参加可能なことが条件となる。

日程:

10月25日(土) 13:00 - 17:00 縄文土器の復元製作

11月8日(土) 10:00 - 16:00 頃 土器焼成実験と観察

* 雨天の場合は、日程変更または中止の場合もあります。

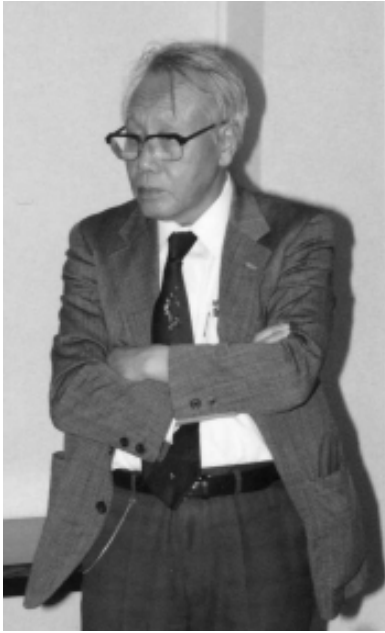
参加費: 無料

事前登録: 必要(15名定員、先着順受付) 10月15日までに下記まで連絡ください。

問合せ先: 竹尾 進(経営管理課広報企画係長) mail: takeo-susumu(at)tef.or.jp

TEL: 042-373-5296、 FAX: 042-374-2161

堀江正治先生のご逝去を悼む



堀江先生写真
(1991年退官記念会にて)

7月6日午前、堀江正治先生が、別府にて逝去されました。大正15年、東京のお生まれで享年81歳でした。先生は本学会会員、INQUA名誉会員で、琵琶湖掘削などを指導され、第四紀古環境学・古陸水学で国際的な業績をあげられたことはよく知られております。先生は昭和25年3月に東京文理科大学を卒業され、昭和28年から同35年まで京都大学大学院（理学部）に在学されました。その間の同31年から同34年まで米国エール大学大学院（植物学教室）に留学されました。同37年に理学博士（京都大学）を授与されました。同35年京都大学理学部助手になられ、同37年理学部附属大津臨湖実験所に移られ、同43年同実験所助教授を経て、同52年理学部附属琵琶湖古環境実験施設教授となりました。その後、同62年に九州・別府にある理学部附属地球物理学研究施設に移られ、平成2年をもって定年退官され、同年4月1日京都大学名誉教授の称号を授与されました。退官後もドイツ国地球科学研究所客員研究員など国際的な研究活動を行ってこられました。

先生は永年にわたり古陸水学の分野において、研究、教育に努め、また国内外の湖の湖底堆積物試料の分析学的研究を中心として国内外において共同研究を推進し、学際分野としての古陸水学及び第四紀古環境変遷に関する研究で高い国際的評価を得てこられました。

先生は、琵琶湖をはじめとする世界の古代型湖の発達史の解明に力を注ぎ、深層掘削を実施して湖底堆積物を採取し、その層位学的分析に基づいて古環境古気候の変遷を論じ、きわめて優れた成果を挙げられました。特に、琵琶湖における深層掘削（200 m.1400 m）は、世界にさきがけ、古代型湖の細粒の粘土堆積物を用いて、第四紀古環境変遷を明らかにできることを明示して国際的に高い評価を獲得されました。すなわち、琵琶湖堆積物が均質な粘土相からなる性質と海洋と比較して速い堆積速度を有している利点に着目し、古地磁気学的研究・地球化学的分析研究・花粉分析学的研究・微化石分析研究・火山灰研究・年代学的研究・粒度分析研究を同一の層準の試料で行い、その相互の関連を用いて過去200万年間にわたる第四紀の環境変化の面から明らかにし、地磁気の反転現象や氷期・間氷期のサイクルなどの汎地球規模の現象が琵琶湖堆積物に明瞭に残されていることを明らかにされました。

また、これらの掘削研究を進めるために、重力や地震波探査などの地球物理学的探査法を導入され、湖盆全体の形状や堆積物分布などの情報をもとに、掘削が実施されなければならないことを示されました。この過程で、多岐にわたる内容を含むこの学際的な研究を、国内各大学の研究者を統合・組織化してこの琵琶湖の深層掘削を全国的視野から扱い

推進され、また、その成果や試料を国際的な組織（国際陸水学会）での活動を通じて広めてきたことは、将来の統合的研究の在り方に対する貴重な示唆を与えたものでした。これら琵琶湖掘削研究を、学会誌はもとより、Paleolimnology of Lake Biwa and the Japanese Pleistocene、IPCCCE Newsletter、に報告されるとともに、「Lake Biwa」、「琵琶湖底深層1,400mに秘められた変遷の歴史」、「History of Lake Biwa、Die Geschichte des Biwa Sees in Japan」などの図書として、日本語、英語、独語、露語で出版され、世界に琵琶湖堆積物による古陸水研究の重要性を広められました。また、先生は、研究初期から注目されていた日本高山地（日本アルプスや日高山脈など）の氷河遺跡研究に多年従事され、関連研究の進展を図ってこられました。

以上の研究によって、気候変化の痕跡を明示する高地の氷河堆積物と低地の湖底堆積物との対比について顕著な業績を挙げた成果が高く評価され、昭和61年6月9日に日本学士院賞を授与されました。

先生は、日本陸水学会評議員、同学会幹事長、日本第四紀学会評議員を歴任し、学会の運営と発展に多大な貢献をするとともに、国際陸水学会（SIL）の副会長を務め、国際学術誌のレフェリーの任も果たされました。また、国際的研究連絡誌の編集を務め、国際シンポジウムの組織委員長を務めるなど国際的研究交流に貢献されました。

以上のような永年にわたる教育研究上の業績や、国内外の活動を通して学術振興発展と社会的発展が顕著であるとして、平成9年11月3日勲三等旭日中綬章が授与されました。

私と先生との思い出は、先生がたどってこられた戦後の研究生生活の後半生の部分にあたります。1400 m 深層掘削は1982年から1983年に実施され、私の博士論文作成の直後であり、新たな研究テーマを発想する上で重要な機会になりました。琵琶湖堆積物のほとんどを観察できる機会を得ることは研究者人生の中でも稀有のことであり、また、多くの他分野の先生方との共同研究のスタイルを学ぶ絶好の機会でした。その後も日本列島の第四紀湖沼堆積物の年代を明らかにするために、東北地方から種子島まで、1泊2日の強行軍で火山灰試料を採取して回ったこと、ニュージーランドやオーストラリア、ロシアのバイカル湖での調査・研究などが思い出されます。定年後もウーンやポツダムをベースとして国際的共同研究を続けてこられました。先生は、世界中を飛び回っておられ、どこでも日本時間で生活され、なんと超人的な体力をお持ちだろうと感心させられていました。今年8月にオスロで開催された万国地質学会議の折に、先生の訃報を知った外国からの参加者が琵琶湖堆積物の研究発表である私のポスターブースに尋ねてきて、先生の思い出を語ってくれたことが印象に残っています。

気候・地球環境変動が地球規模の課題として大きく取り上げられる時代にあって、この分野の先頭に立ってこられた先生のご逝去は学会にとって、非常に残念なことであります。心からご冥福を祈ります。

（京都大学・竹村恵二）

中川久夫先生のご逝去を悼む

中川久夫先生が、2008年8月5日にご家族の見守るなかで静かに旅立たれた、との悲報を受けたのは、8月7日の夕方でした。半ば信じられない思いでお宅にお電話申し上げたところ、葬儀を済ませてご帰宅されたところでした。皆様にはご迷惑をおかけするのでお知らせするのを遠慮されたとのことでした。ご病名は肺癌から転移した肝臓癌とのことでした。

中川先生は、国際的見識と骨身惜しまぬご努力によって「地質体に残されている記録が全球的に対比可能である」という現在の我々の常識を、詳細な層序調査と地磁気極性層序に基き具体的に示された世界の第四紀学界の巨星でした。

中川先生は1927年10月22日東京にお生まれになり、第六高等学校を経て東北大学理学部地質学古生物学教室、同大学院に進まれ、1959年に教務職そして助手・助教授を経て1986年から1991年まで教授を務められました。第四紀学会では、1962年から評議員、1988年から第四紀学会渉外幹事と日本学術会議第四紀研究連絡委員長を務められ、2006年に名誉会員になりました。国際地質学連合 IUGS では1963年から地磁気極性年代尺度小委員会委員・新第三紀-第四紀境界ワーキンググループ委員・古第三紀層序小委員会委員・新第三紀-第四紀境界ワーキンググループ委員、国際第四紀連合 INQUA では、1988年から年代層序における第四紀に関するワーキンググループ委員などの国際委員を歴任され、国内では、宮城県や仙台市の各種委員を歴任され仙台市政功労者になられるとともに、地質学会では、1972-1986年に評議員、1979年に国際交流委員、1987-1990年に編集委員を務められ、1998年には名誉会員になりました。地質年代模式地の地磁気極性層序確立については海外学術調査隊を1973-1983年に組織され、先頭に立って現地調査と試料採取を指揮されました。

房総半島が地磁気極性層序を日本で確立するための候補に上がってから、試料採取調査や古地磁気測定機器開発などの相談に乗っていただく為に、毎日夕方から中川先生の研究室にお邪魔し、大学・学問・地質学について話し合うことが日課となっておりました。

東北大学では1960年代に仙台市の中心部から青葉山への移転計画が進められ、中川先生は愛用の製図台で教室の図面を引き、本部との交渉を一手に引き受けておられました。総面積は変わらぬものの多くの実験室が加えられ地質学の新たな発展に備えられました。理学部の先陣を切った1969年春の地学・生物移転直後に大学紛争によって多くの建物が学生によって封鎖されましたが、その間、中川先生はドイツのヴュルツブルグ大学に長期在外研究員として滞在していました。模式地の調査によって第四紀の4回の氷期には層序学的に問題があることを明らかにされ、イタリアの第四紀層序模式地から地磁気極性層序のための試料を東北大学に送付下さいました。大学紛争の中、試料が届かず心配しましたが、文学部の考古学教室に送られていたことが判明し、早速、古地磁気の測定結果とともに浮遊性微化石層序の検討結果を送り返しました。日本列島の房総半島とイタリアの第四紀層序模式地が地磁気極性層序と浮遊性微化石層序によって直接対比可能であるというこの結果はヨーロッパで開催された国際学会で注目されました。日本への帰途立ち寄られた米国でも多くの専門家と討論され、その後の国際舞台でのご活躍の土台となりました。

先生は最後まで第四紀学会のことを考えておられたそうです。最期まで過ごされたご自宅での療養中に酸素マスクを嫌がり、外そうとされたそうですが、ご家族が「今年の学会はどこであるの?」「東京でしょう、学会に行けなくなるよ」と言うに従われたそうです。お棺の釘は地質調査用のハンマーで打たれたとのこと、最後の最後まで地質屋として80年の一生を全うされたそうです。

ご遺族奥様の中川生子様のご住所は「982-0802 仙台市太白区八木山東2-3-6」です。
(新妻信明)

アジア旧石器協会設立のお知らせ

アジア旧石器協会 Asian Paleolithic Association(以下APA)が、ロシア・アルタイで開催された国際シンポジウム(A.P. オクラドニコフ生誕100周年記念、6月24日 - 30日)の期間中の2008年6月29日に、正式に設立されましたのでお知らせいたします。この学会は、ロシア・中国・韓国・日本(日本旧石器学会)の各国内旧石器学会が5年間に渡り協議を行い、主として東アジアの旧石器時代研究を国際的な連携と協力のもとに行う場を定期的に確保することを目的として設立した国際組織です。当面の間は毎年4カ国の持ち回りで国際シンポジウムを開催することが決定されましたが、参加国(アジア研究を行っているアジア以外の研究者等の個人参加も可)や活動内容(国際的に活躍する若手研究者の育成等)の拡大も視野にいらしています。今回の設立大会には、日本から8人、中国8人、韓国9人、ロシア7人の研究者が参加しました。

選挙の結果選出された執行部は、以下の通りです。

会長: A.P. デレビアンコ(ロシア)

副会長: 稲田孝司(日本)、高星(中国)、李隆助(韓国)、N. ドロズドフ(ロシア)

執行委員: 小畑弘己・小野 昭(日本)、韓昌均・李憲宗(韓国)、王幼平・石金鳴(中国)、
M. シュニコフ・G. メドヴェージェフ(ロシア)

次回のAPA国際シンポジウムは、2009年10月に北京で開催される予定です。続いて韓国、日本の順に開催されることが内定していますので、日本での開催は2011年になる予定です。小さい組織ですが、日本の学会がその構成の一翼を担って国際組織を立ち上げた経験は、日本の考古学の歴史ではきわめて少ないと思われます。その意味では、APA設立の意義は決して小さくないと考えています。

今後は、APA等の場を活用して、失われた日本旧石器研究の国際的な信用の回復と研究の再構築、特に次世代を担う若手研究者の交流・育成に務めてまいりたいと考えています。
(佐藤宏之)

神奈川県立 生命の星・地球博物館 特別展

「箱根火山 いま証される噴火の歴史」

箱根火山の形成モデルは、1950年代に故久野 久先生により確立されて以来、半世紀にわたり使われ続け、カルデラ形成史の教科書的存在にもなってきました。しかし、近年、詳細なフィールドワークと最新の分析機器の導入により、新しい山体形成モデルが提案され、さらに新たな火山活動などもわかってきました。本特別展示では、箱根地域における基盤の形成から火山体の形成までを、新旧モデルをふまえて紹介しています。

期間：2008年7月19日から11月9日

詳しくは：

<http://nh.kanagawa-museum.jp/index.html>

http://nh.kanagawa-museum.jp/event/tokubetu/2008_hakone/index.html

日本第四紀学会普及講演会

「極限のフィールドワーク：南極観測からわかる地球環境変動の過去と未来」

日時：2008年11月16日（日）

会場：国立科学博物館日本館 2階講堂（東京都台東区上野公園 7-20）

共催：国立極地研究所、国立科学博物館

世話人：三浦英樹（国立極地研究所）・齋藤めぐみ（国立科学博物館）

参加費：無料（ただし一般・大学生は入館料の600円が必要；65才以上は年齢を証明できる書類があれば無料；小中高生は入館料も無料）

事前申込み：不要

プログラム（予定）：

1. 南極の自然環境と野外調査（フィールドワーク）：探検から研究観測へ・・・高田将志（奈良女子大）
2. 南極の氷を掘ってなにがわかる？：約1000 kmの距離を時速10 kmで移動、気温マイナス60度の世界で、3700 mの長さの氷の柱を掘り出す理由・・・福井幸太郎（国立極地研）
3. 南極の海底を掘ってなにがわかる？：厚さ1.5 mの海氷の下は水深600 m、薄氷を踏みながら重さ4トンの雪上車が走り回り、海氷上から海底の泥を取り出す理由・・・澤村教伸（北海道大）
4. 南極の砂浜を掘ってなにがわかる？：削岩機で掘っても一日わずか15 cm！コンクリートのような永久凍土に深さ4 mの穴を掘り、スコップで砂浜に長さ200 mの横穴を掘る理由・・・前杵英明（広島大）
5. 南極の石を採ってなにがわかる？：ヘリコプターで飛び回り、ハンマーで60 kgの石を採って背負って、3トンの石を集める理由・・・岩崎正吾（広島大）
6. 南極の第四紀研究と地球環境変動の研究：南極の氷、地形、石、泥、化石が語る地球の過去と未来・・・三浦英樹（国立極地研）

第四紀通信に情報をお寄せ下さい

第四紀通信の原稿は随時受け付けております。

広報幹事：苅谷愛彦（kariya(at)isc.senshu-u.ac.jp）宛にメールでお送り下さい。

第四紀通信は奇数月月上旬原稿締め切り、偶数月1日刊行予定としていますが、情報の速報性ということから、版下が完成した段階でホームページに掲載するよう努力しています。奇数月15日頃にはホームページにアップするようにしていますのでご利用下さい。

日本第四紀学会広報委員会 専修大学文学部環境地理学研究室 苅谷愛彦

〒214-8580 川崎市多摩区東三田2-1-1 電話：044-911-1014 Fax：044-900-7814

広報委員：越後智雄・糸田千鶴 編集書記：岩本容子

日本第四紀学会ホームページ <http://wwwsoc.nii.ac.jp/qr/index.html> から第四紀通信バックナンバーのPDFファイルを閲覧できます。

日本第四紀学会事務局

〒162-0041 東京都新宿区早稲田鶴巻町519番地 洛陽ビル3階

E-mail: daiyonki(at)shunkosha.com

電話：03-5291-6231 FAX：03-5291-2176